

二-35

応用心理学論文集

第2集

第15・16回大会発表研究抄録

第15回大会（昭和28年7月4—5日 埼玉大学会場）

第16回大会（昭和28年11月22—23日 茨城大学会場）



日本応用心理学会

140.4
N77
V.15=16

緒言

本論文集は本学会第一五回大会（昭和二八年七月 会場埼玉大学）および第一六回大会（昭和二八年十一月 会場茨城大学）において発表された研究の概要を集録したものである。

印刷経費の関係上一篇の長さを八〇〇字以内に止める必要があつたので、発表者提出の原稿のうちこの限度を超えたものについてはやむなく短縮改稿を敢てした。このような措置をとることについては第二〇回大会（昭和三〇年一〇月 会場広島大学）における総会においても承認を得たことではあるが、改めてここに執筆各位のご諒承を乞う次第である。

論文掲載の順序については、大会次第書に掲げられた順序に従い、発表室別に一括して類別名称を付けておいた。但し中にはその名称に相応しくない論文も含まれている。

紙面の都合上、詳細な目次を掲げることができないので、類別名称を整理して掲げることにした。ページ順は前後するけれども、繙読上便利であろうと考へてかようにして見た。

目次不備を補うため、巻末の人名索引と大会開催当時の次第書とを利用して頂きたい。

発刊の推進については特に運営委員小保内虎夫氏、印刷については会員妻倉昌太郎氏から多大のご尽力を賜り、原稿短縮の作業および校正については本会事務局員および日本大学心理学専攻大学院学生諸君の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。

昭和三一年六月三〇日

日本応用心理学会事務局において

長谷川 貢

第一六回大会発表研究抄録

第一六回大会発表研究抄録

目 録

一、知覚・学習	七〇
二、学習	七七
三、發達	七五
四、社会	六六
五、検査 I	六六
六、検査 II	六七
七、教育	六二
八、職業指導	七三
九、人格	八三
一〇、人格・異常	八〇
一一、異常	六五
一二、疲労	七四
人名索引	九

発 達

第一日 第一室 午前の部

(1) 幼児のつたえ (その4)

法政大学 天 野 章

生活表現の指導におけるつたえの観察

対象 保育園 五歳児 一一〇名

東京神谷町保育園 四〇名

東京自由保育園 四〇名

東京井之頭保育園 三〇名

期間 二八年九月から現在継続中

方法 実践観察法(その1で説明)

問題の提起

人格形成における、幼児の言語活動は、のちの学齢期における言語活動より広い、つたえとしての文章構成、表現活動への飛躍の準備期でもあり、またゴイの急激な増加、語形の成立、相手へのつたえの理解、内面的言語と外面的言語の分化等非常に重要である。

そこで、こうした課題に答えて、保育園、幼稚園等の幼児集団における研究も少くない。わたくしはそうした研究を参考にしながら、現実の幼児集団における、言語活動を中心しながら、幼児の生活表現の発達問題の理解、つたえとしての言語機能の面について考察をすることにした。

幼児集団においては、現在、生活発表、社会的、生活的なほなしあい(先生の指導)自由あそびにおける自由あそび等が指導されている。

ところが、最近、保育園、幼稚園等では、相手の理解のふかまり、ゴイ、表現等を豊にするという意味で「おはなしあそび」という言語指導がなされてきている。

そこで、従来のいろいろな言語指導、言語活動と、この新しく指導されつつある「おはなしあそび」とを比較しながら、その指導、並に幼児の言語活動を発達のみにすることにしたい。

研究をやりはじめたばかりで、結論としてはなにもいえない。一応問題の提起だけしておく。

(2) 幼児の宗教性の発達

柿木坂幼児
教育研究所 ○佐藤初重

東京学芸大学 阪本一郎

(1) 研究目的 幼児における宗教性の発達状況と、その条件とを調べて幼児教育の参考資料を得たい。

(2) 研究方法 (1)方法—質問紙を配布し、これによつて親が幼児に質問し記入させる。(2)対象—キリスト教保育施設、全国の見本八〇の園児三、五三〇名、このうちキリスト教の家庭二七〇、仏教二、六五〇、無宗教六一〇である。(3)時期—昭和二六年一〇月。

(3) 結果 (1)幼児の宗教性をこの研究では、(a)感謝の態度、(b)ひとの幸福、(c)安心感、(d)神仏への関心、(e)ふしぎな力の五因子に分析して、それぞれについての発達を家庭の宗教別に整理してみた。(2)感謝の態度—「ありがとう」を言うことは年齢や家庭によつて大差はない。「もつたえない」の理解は家庭による差は少いが三—五歳に急昇している。報恩は無宗教の家庭では著しく遅れている。(3)ひとの幸福—他人を喜ばす態度は無宗教の家庭の子は一般に低い。三—四歳の頃に急に発達している。(4)安心感—幸福の自覚、困難時の救助者の信仰などは年齢による差は少く、無宗教の家の子どもは著しく低い。「死後どうなるか」については、後者は物質的な理解をもち、不安定である。(5)神仏への関心—神

仏の存在は無宗教の家の子を除いて、他は年齢による差なく信じられている。神仏のはたらきの理解も、宗教的家庭の方がすぐれている。(6)ふしぎな力—柿の種から芽が出るわけ、孤独な時の行動を照らすものもの有無について神秘観を持つものは、やはり宗教的家庭に多い。

(3) 幼児におけるホーム・ダイナミックス

東京学芸大学 阪本一郎

1 問題 幼児の行動ないしは人格形成を指導するには、かれらの家庭における社会的適応の事態を手掛かりとしなければならぬ。しかるに幼児は家庭の諸成員と一様の社会的距離を持ち、安定した心理学的関係にあるかどうか。レヴィンは一九四〇年に結婚生活のグループダイナミックスを書いているが、幼児はこの中にどんな位置を占めるか。

2 資料 この考察の資料として、キリスト教幼児教育研究所が全国の幼稚園八〇を抽出して、親に対して質問紙をもつて記入を求めた三、五〇〇名の回答を用いた。

3 考察 (1)幼児期のいちじるしい反抗現象はかれらの社会的葛藤の情緒的な解消作用である。幼児の親に対する反抗をその程度別にみると、三歳において、よくさからうが八・九%、時々さからうが四一・一%で、すでにかなりの反抗があるのは、かれらの「心理的出産」がこれより前にあることを物語っている。四—五歳では、よくさからう、時々さからうを合わせると、それぞれ六

四%、六三%で最も高い反抗率を示し、ほとんどさからわぬが一・八%、一〇・二%であるが六歳では反抗率はやや低下する。(2)反抗の対象は、母が三八%で最上位で以下姉、兄の順であるが一方愛情の対象としても母が三五・六%で最上位を占め、次に弟妹、父の順になつてゐる。(3)幼児の父母観は親の性能に対する評価が最多で母はプラスの影響者、父はマイナスの影響者とみられてゐる。また父は家庭での役割がよく認識され幼児の行動の対象となることは母より少い。(4)以上、家庭において子と母とが緊密な小グループを形成しこの中核に弟妹を含む第二層、さらに父を含む第三層に及ぶと考えられる。

4 結論 幼児の家庭生活を力学的全体とみると、そこには母を中心とするいくつかの層序がある。そして、かれらはまだ家族全体のダイナミックスには支配されていまいと言えよう。

(4) 社会的共感性 (Sociempathy) の発達

東京学芸大学 田中熊次郎

(1) 仮定 社会的共感性は自己を主体として知覚し理解し、容認する他人に対する好意感と、自己を客体として知覚し理解し感受する他人の自己に対する好意感の期待との交互関係において、その構造の一角が把握され得ると考えられる。

(2) 方法 次に二種類のテストを行う。(a)社会的容認

性検査——自己を主体とし他人に対する選択と排斥。(b)社会的感受性検査——自己を客体とし他人の自己に対する選択と排斥との期待。以上の(a)(b)をそれぞれ四つの場面——くみかえ、遊び、勉強、休日の問題とする。

(3) 被験者 小学校四五六学年生および中学一三学

年生につき二学級宛。

(4) 結果 (a)検査における順位と(b)検査における順位を算出しその列位差法による相関を求めた。考察し得たことは、(1) rの値の学級差は小学生の場合小で中学では大。(2) rをz変換するとrは高学年になるにつれて値が下降。(3)各学級の各集団のrはおよそ高学年になるにつれて値は下降するが低学年では必ずしも下降しない。(4)各学級集団比較では小学校で高、中学校では高が高い。

(5) 考察 社会的共感性は複数行動体系の形成過程と共に生成する。即ち自己から他人への好意関係、及びそれによつて生ずる他人から自己への好意の期待関係、それらの交錯、或は一致不一致が集団の心理学的構造の安定不安定の要因となるだろう。これを式にする



などの組み合わせが考えられる。本研究で学年の増加につれてrが低くなるのは集団の心理学的構造が内面化し、複雑化し不安定であるということである。しかし直接的好意関係と期待関係が不一致になることは、極端な社会的地位を緩和することになつて、集団の成員個人としては、四つの生活の場面を通じてそれぞれに比較的に適応度を高め得ることとなるであろう。

(5) 青年の夢

横須賀市教育研究所 村山秀雄

I 調査目的 青年の夢を蒐集し調査を行い、これを分析して青年の心理の深層にふれる。

II 対象 某大学生四〇名(合三八、〇二)

III 方法 (1)夢の記録——夢の記録用紙を作成し、これに一ヶ月間夢の記録をさせ無記名で提出させた。(2)質

問紙法による夢の調査——夢の記録提出日に一六項目の質問を無記名で答えさせた。

IV 結果 調査内容は次の七項目であつた。(1)青年の夢の原因、(2)夢の中での対象、(3)夢の回数、(4)翌朝夢の内容を思い出せるか、(5)どんな時に多くみるか、(6)性格と夢との関係、(7)健康状態と夢との関係。今回は(1)についてだけ発表する。原因として願望、恐怖(傾向)は八六例六五%であり、内訳は心配ごとが三八例二九%、性に関するもの一五%、恐怖一二%、変つた夢五%、強い望み四%であつた。一方、記憶(経験)は四六例三四%で内訳は日常の出来ごと二六%、趣味に関するもの八%である。また心配ごとをさらに分けると、家庭に関するもの一二例、職場一〇例、社会的出来ごと五例、自己の身体将来に関するもの、学校生活に関するもの各四例、その他三例であつた。性に関するものを分類すれば、異性との会話に関するもの八例、接吻に関するもの五例、性交に関するもの三例、結婚に関するもの二例、その他二例となつてゐる。これらの分類を見ると青年の夢の原因として、願望、恐怖というものが非常に多いように考えられる。次に性に関するものは二〇例一五%になつてゐるが、性的な夢については、実際はもつと多いと考えられるので青年の夢には性に関連するものがまた非常に多いように考えられる。

V 夢の事例(原文および分析の結果は略)事例(1)母が健在なのに母が死んで葬式が行われ涙のために目がさめた夢。事例(2)縁の下の深い穴の中で女性との接吻、乳房をにぎる夢。

VI 結び 青年の夢の研究は青年の心理に深くふみ入ることのできる一方法と信ずる。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

(6) 青年の人生観について(第二報告)

静岡大学 石川 透

1 問題 前回の大学生に關しての予備調査に基づいて、今回は生の目的および死についての考えの發達過程を明かにしようと試みた。

2 方法 質問紙法。

3 対象 静岡市内の県立高校生(普通科)内訳各一年四二名平均一六歳三月、二年四六名一七歳三月、三年四五名一八歳四月。♀一年六〇名一六歳一月、二年五四名一七歳一月、三年五一、計各一三四名、♀一六五名。

4 期日 昭和二八年一月四日—九日。

5 結果 A人間は何のために生きてるかという問題について。(1)漠然と考へ始めた時期は男女とも小六—中三頃が普通で特に男子は中三が最高である。動機については学校生活、自己に關する事柄が第一位である。(2)真剣に考へ始める時期は中三から多く、高二頃までが中心となる。その動機は自己に關すること(二〇%)、読書(男二〇%、女一四%)、社会事象の順で、その内容は懐疑的(三〇%)、個人的理想のため(男二二%、女二五%)が多い。B死についてどう考へるか。(1)漠然と考へ始めた時期は男女とも小一—高三に至る広範囲で、特に著しい時はない。動機は近親者の死の体験、また、新聞記事等の死に關するものが男女とも約五〇%を占め、その考への内容は男では恐い、死後どうなるか、女では恐い、死にたい、なぜ死ぬかなどが主である。(2)男女とも中二から高二頃から真剣に考へ始め、動機は(1)と同様だが自己に關する事柄が(1)より多いことは注目される。また、男は死より生を考へようが二二%で第一位だが、女は死にたいが一六%、自殺否定が一二%である。

C問題のA Bをこれからも考へねばならぬし考へたいという答が各学年とも圧倒的である。D今までこれらの問題を考へて来た方法は男女とも話し合ひ読書が第一・二位である。Eこれからとつて行きたいと考へる方法としてはDと同じ順位であるが、いろいろと経験してみたいという希望が、Dよりも多くなつてゐる点が男女とも目立っている。

(7) 青年の生活と感情(中間報告)

法政大学 早川 元二
三重県立大学 吉田 正吉

I 目的 夜間部大学生に關してその生活条件に規定される彼らの感情、気分の変遷と処世的態度について考察しようとした。

II 方法 「わが生活、わが……」という作文を書かせた。そして「わが……」の箇所は例えば「悲しみ、喜び、怒り、苦しみ」などの言葉を自分で適宜選んで書くようにした。

III 対象 法政大学一年各一四二名、平均年齢二〇。

IV 結果 作文の題名に選ばれた言葉から分類すると大きく「快」「不快」に分けられ、A群「快」は一五% B群「不快」は八五%、不明五%で彼らの大部分が怒りと苦惱の日常を送つてゐることが分つた。内容については、A群には(1)精神主義的なよこび(儒教的克己心、神への依存)、(2)未来生活への安易な期待(主として学歴への期待)、(3)逃避的よこび(スポーツ、映画、酒、女)が区別された。B群には(1)生活苦、金、時間、職場での不満と肉体的苦痛や不安、(2)勉強のしにくさ、(3)抗議(特に職場の対人関係)、(4)職場、社会の改革要求、組合意識からの建設的解決策を追求するものが主でA群中一〇%を占む。

V 考察 彼らの生活上の客観的条件は大差がないにもかかわらず、少数でもA群のような逃避的境地や精神主義的態度がみられ、特に儒教的立場から現実の悪条件に目を閉じ欲求不満耐忍力を築く努力は果して夜間学生に勉学の問題を解決するものであろうか。それに対してB群は、現実の苦悩や怒りや悲しみをそのまま訴える程度のもので、また現実の生活を規定する客観的条件に対する批判や抗議に向つてゐるもの、更にそこから客観的な悪条件の改革(地理的環境への働きかけ)の方策を追求しようとの態度を強く示すものも含まれている。この点、現実の生活苦に目を覆うことなしに生きようとするこのリアリズムの方向は、欲求不満の解決を単に行動環境の処理にとどめようとするA群の構えよりも一層発展性を示しているように思われる。

(8) 親友形成の条件(第二報告)

山口大学 亀井 定雄

前回親友関係形成の条件につき中、高、大学生を調査したが今回は小、中、高校教員(各一〇七人♀一四六人)を対象として同様な調査をした。方法は Runner, J. R. による友人関係の分類——信友、親友、仲好し、知合い、積極的な仲間、消極的な仲間、見知り——に従ひ、I信(親)友関係成立の年齢。II信(親)友の人数。III結合の要因、IV信(親)友相互間の類似、相違点とを本年七、八月質問紙法によつて調査した。結果はIの場合、結合時年齢をSの年齢、三〇歳までと三一歳以上に分けると、前者は平均各一九・七歳(S・D・三・二)、♀一八・二歳(S・D・三・四)、後者は平均各二二・一歳(S・D・六・四)、♀二二・七歳(S・D・七・一)である。これから信(親)友関係は多く青年後期に結ばれていることが分る。年齢の増加と共にS・Dが大きくなるのは特別の機

縁や同職関係等で結ばれる場合が多くなる為であろう。

Ⅱの場合、信友は一人が多く(合三七・四%、♀五二・八%)、次に〇人、三人の場合一〇・三%、♀四・一%である。親友は二人が多く(合二六・二%、♀二八・〇%)次に三人、一人の順で平均合三・一四人、♀二・八一人である。尙異性関係では男では一三・一%が恋愛関係をもち女は一六・四%が有している。これを信友の総数に比すと男では一七・七%、女では二一・一%で異性間の信友関係の成立は同性間より極めて困難なことが分る。Ⅲの場合、要因として同趣味教科スポーツ等が合一四・〇%、♀一〇・三%、性格類似合一二・一%、♀一二・五%、同級同窓同年、特別の機縁、同職、環境類似、尊敬信頼の順で下向する。学生に比べて、趣味、思想生活態度等が要因として多い。これは社会的経験の増加を示すものである。Ⅳの場合、男は思想態度人生観の点で類似していると答えたものが最高で女は趣味の点で高い類似を示し、男女とも性格では低い類似しか得られなかつた。男では性格の類似が結合の要因であつたのに比べ逆の結果となつたが、Ⅲは結合動機であり、Ⅳは現実の性格を反省したものだからであろう。これに対し思想態度人生観等では類似点の絶対的である。成人においては思想的結び付きが極めて大切なことが分る。

(9) 性教育における中学男女生徒の感情の動きについて

横浜市立教育研究所 岡田寅次

Ⅰ 目的 性教育において最も重要なことは生徒の感情の動きであるから、教壇で集团的取扱を受けた時動く感情を記録させてその男女差、地域差を知り併せて教師による差と話の内容による感情の差を調べ性教育の一資料としたい。

Ⅱ 方法 教師の話と僅かの板書で授業を進め男生徒は三時間、女生徒は平均六時間の課程とし各時間毎に三五種の感情のうちから任意選択させ処理した。地域差をみるために、A区(赤線区を持つ学校)、B区(住宅商店街を持つ)、C区(酪農を営む農村)とにわけた。教師差をみるためには、A区では男生の三組を自分と男教師二名で、女生の三組を自分と女教師二名で、それぞれ担当した。話の内容への反応を知るためにB区の女生三組を自分一人で担当し第一組の話の内容を第二、三組で二ヶ所入替え、なおA区の授業で一ヶ所ずらしておいた。内容や感情の種類は四ヶ年にわたる研究と感情の記録を資料にして構成した。

Ⅲ 結果 全般を通じ望ましい感情四つに高い山が出来、不潔感、嫌悪感、恐怖感、羞恥感等はくつと低い。男女差はABCの順に開きが大きく、ABでは女生は女性嫌悪に、男は男性優越に傾く。地域差としてCBAの順に性的免疫が高い。担当教師の差による反応差は、女生では女性嫌悪、結婚嫌悪、恐怖で差を見せ男生では話に対する疑問感と男性優越感に開きがある。それは結局教師の人生観に影響されているようである。話の内容と感情の動きとの関係をみると、男女交際の話は好ましい感情を伴い、性病の話は恐怖嫌悪感が強く、性交受胎の話は女性嫌悪不安感を伴いがちである。男女交際の話にも、「興奮した(自分もやつてみたいと思つた)」という感情はほとんど動いておらず、B区に僅かに、男生徒が記録しているに過ぎない。この感情がA区に少なく、B区にかえつて多い点は注意すべきことからである。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

社会

第一日 第二室 午前の部

(10) 農村におけるマス・コミュニケーション

ケーシオン

(1) 基礎理論

社会心理研究所○森 永和彦
社会心理研究所 南 博

問題点は農村におけるマス・コミュニケーション、殊に、そのコミュニケーション・バリエーションについてである。

第一に心理的条件第二に非心理的条件である。

非心理的条件はこれを細分すれば

- 一、経済的条件
- 二、技術的条件
- 三、生活条件
- 四、文化的条件

心理的条件は、これを細分すれば

- 一、パースナリティの習性
- 二、パースナリティの態度
- 三、パースナリティの習性のうち
懐疑的、フレキシビリティが無い、実用的、権威主義等々を上げる事が出来る。

又態度に関しては

保守性、新奇な物への反撥、第一次集団への依存、地方主義等々をあげる事が出来る。

すなわち大きく言えばパースナル・コミュニケーションの信頼という事である。

それではこのバリエーションをなくすためにはどうしたらよからうか。

種々の原因のうち、その一つとして、彼らの実用的な

非合理性が意識の根本である。労働条件の改善に大きな興味を持たせねばならぬと思うのである。

(11) (2) 調査方法 (方法論)

社会心理研究所 ○本 田 充
社会心理研究所 斎 藤 良子

一、農村では観察法のテクニックをリファインさせて行く事が必要である。観察法としては研究者が調査対象に参加しない自然観察と研究者自身が調査対象の人たちと交渉を持つ参加観察との二つがある。

二、以上の調査は調査員が現地に行つて行う直接的な調査法であり、またこれに対し農事普及員など農村の生活に上く溶けこんだ人の協力を得て調査を行う間接調査法も今後重要性を増すであろう。

(12) 集団の成層構造に関する

一 研究 (第七報告)

実践女子大学 小林 さえ子
実践女子大学 ○斎藤 美智子
実践女子大学 竹内 緋佐子
実践女子大学 小谷 和子

目的 一定の課題の共同作業において、固定した成層化を生じない集団における成員の社会的行動を明かにしようとする。

実験手続 小学校五年生の学級から年齢、性、知能、性格などの類似した者を選びソシオメトリにより中性的間柄を確かめ、積木作業によつて成員四名の固定的成層をみない男女の集団を上位者及び下位者ごとに各一つずつ合計四集団を編成した。課題は机上の一枚の画用紙に

クレヨンで塗り絵をさせることである。各実験系列の課題構造は四分節図形二と統一図形二、自由面と無意味図形各一。「四人でできるだけきれいに塗るように」教示する。「総体行動法」により集団作業中の各成員の有意味的社会的行動の一切を記録する。

結果 (1)積木作業によつて組織した固定的成層なき集団の構造は、課題事態の異なる塗り絵作業の集団にも移調して特定の指導者と追従者なき集団が出現した。各集団成員の示した社会的行動の様式を「優位的」「服従的」「客観的」「その他」に分類しこれを比較すると一集団内の四成員のそれは相互に極めて類似していることが一定の操作で確かめられた。即ち集団に成層なき所以である。

(2)最も高い頻度を示した社会的行動の型は「客観的」なそれであつて、指導追従を意味する「優位的」「服従的」の型の約二倍ほどであつた。男女を比較すると「客観的」な型は男子の方に多い。上位者集団と下位者集団では、前者の方がより少い。又四分節図形は統一図形及び自由面より一層客観的なものが多い。総じて成員間に客観的言動が少く優位的服従的言動の多い集団ほど成層化の可能性が大であるといえる。

(3)本実験では成層化は瞬間的な事態に応じて成立し直ちに解消した。中心者には成員が交互になつたので固定した成層化を生じなかつた。

(4)成層なき集団では下位集団化の数が少く一体性の度が低く成員の課題に対する興味の度もうすく、かつ「放任的集団」と類似する集団行動の特性を示すことが屢々であつた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

(13) 児童観客調査

人形劇の場合——I

法政大学 乾 孝

今迄演劇、紙芝居、映画についてそれぞれ児童観客の反応、理解に関する研究が続けてきたが、今回はそれらと並んで、人形劇に対する児童の見方を調べることにした。これはその第一報である。

問題 今回は取あえず既成の調査と同じやり口を踏襲し、大まかに、他の文化財との対比における人形劇の特徵に対して見通しを得ようとした。

やり口 場内反応の反復記録、綴方及び質問紙、問答による。人形劇は(a)「大ぶた小ぶた」一幕及び(b)「イワシの貰つた金貨を生む子やぎ」二幕五場。前者は低学年向き後者は高学年向きとして計画されたもの。人形は両手遣い、人形劇団「ひとみ座」の協力による。

調査対象 小学校一—六年男女。(A)東京及び(B)東北農村。前者は劇場公演、後者は小学校における巡回公演の観客。

結果 (1)年齢の問題 質問紙では(B)三二一名中a、bの比較において三年生ではほぼ同数以外は七〇—一〇〇%、bを好むと答えた。他の資料を参考して、一、二年はbのセット、衣装などにひかれ、三年に到つてaの意味を解し、四年以上でaをそれなりに愉しむようになったと推論される。面白かつた場所にいつても一、二年はaで動きの面白さを挙げていたのに対し高学年は狼の演技などに注目している。また狼がやられる所の記述も高学年ではぶた兄弟の協力で同感し低学年では動きのみを敘している。bでも低学年は動きを喜び、慾ばりの地主が自分は慾ばりでない正直者だと答えるような面白味は高学年のみのものである。年貢麦を風に飛ばされる悲劇

の理解は五年生からで、「地主」は高学年でも「悪意」「王様」と誤解された。

(2) 人形劇の特殊性 ①登場人物との同一視は弱い。五年生ではむしろ優越感をもつて対している。②技術的関心は演劇に対してより早くから始まる(四年生)。しかも写真への要求が強い。③人物の性格は分り易いが見られるまで時間を要する。④客観的批判態度を養うのに利点がある。また容易に自分たちでやつてみる気持になる。

(14) 大学生の時代感覚

早稲田大学 伊藤安二

一九五三年七月早稲田の学生一七三人に対して五〇項目にわたる質問を行った。結果を集計分類すると次のようになる。

(1) 学生の約三分の二以上の是認一一、不賛成九、計二〇。実例をあげれば

是認の部 「日本はアジアの人々と手をつなぐことが大切です」賛成一六七、反対一、わからない一、決定しかねる四、(以下数字は賛成、反対、わからない、決定しかねるの順に記入する)。「今の先生の中には尊敬できない人もいる」一四九、四、六、一四。「生きる為にはヤミ米も買わねばならない」一四八、一二、二、一一。

「先生でもパチンコをやつたりストリップをみたりすることがあつてもいい」一四七、三、一一、一二。「皇太子でも単位が足りなければ進級は出来ない」一四六、一二、四、一一。「時にはうそも方便」一四五、一二、〇、一六。「国を愛する為には外敵を防がなければならぬ」一二三、一〇、八、二二。「先生はどんな場合でも学生、生徒をなぐるのはよくない」一二二、三〇、三、一八。

不賛成の部

「朝鮮の休戦会談がいつになつてもラチがあかなければ原爆を用いるのもまたやむを得まい」一一、一五三、四、五。「大和民族は天孫降臨である」二、一五一、一一、九。「子供がいるのに親が年とつたら養老院に行けというのが今日の考えだ」八、一四三、一一、一一。「天皇陛下の御為に死ぬと父母に教えられた」一八、一三七、九、九。

(2) 学生の半数程度認めたもの一九、うち賛成の向のやや多いもの一五、不賛成の向のやや多いもの四があつたがここでは略す。

(3) 学生がいずれとも決定しかねた事項一一、うち賛成のやや多い項目六、不賛成のやや多い項目五であつたがここでは略す。

学生は案外インテリ的でなく、常識的で時代と共に動いている過去の価値観や独断は否認されている。ふるい日本は再来しまい。逆コースにも限度があろう。新聞にとりあげられている学生は全く一部の学生に過ぎないこともうなずかれるところであらう。

(15) 家庭の職業の好き嫌いに

関する一調査

——特に女子学生について——

日本大学 高島正士

目的 女子学生の職業に対する見方、考え方を家庭の職業をとおして見ようとする。

(一) 方法 つぎの質問紙法によつて調査した。

学校名、年齢、学年、家の職業、現住所

あなたは自分の家の職業を好んでいますか。嫌つていますか。つぎに該当するところを○でかこんでください。

好んでいる。きらつている。どちらでもよい。

わからない。

その理由をかんたんにかいてください。

あなたの希望職業は

以上の問について書かせた。(特別な教示として、どちらでもよい、わからない、としたものも一応理由を書くこと)

(二) 調査の結果および考察

資料が乏しいうえ、かつ不明瞭なものをのぞき、七一一名について整理した。ここからただちに結論を出すことは困難であるが、一応結果をまとめて述べると、

a 好き嫌いの傾向 約六〇%が好き嫌いについて明確にしている。全体の三分の一が家庭の職業を好んでいる。学年がすすむにつれて好む傾向が減少している。これに対し「嫌い」の方が全体の五分の一である。

b これを職種別からみると、調査の対象となつた学生の家の職業は、商業、サービス業、公務自由業、会社員が一番多い。したがつてこれらの職業を好むものが非常に多いが、また他の職業とちがつて嫌うものも、かなり多いのである。

c 理由についてみると低学年ほど自分の周辺に関することで、好ききらいの理由として多いのが多い。高学年になると、職業そのものの将来性、社会性、貢献性等から理由をつけている。一般に生活状況、職業をとりまく環境、ふんいきによるものが多い。

d 希望職業と家庭の職業の好き嫌いとの関係。この関係はあまりなく約八割は家の職業とちがつたものを希望している。家の職業に類したものを希望するものは、家の職業を好んでいるものに多いことがわかつた。

☆

☆

☆

☆

☆

☆

受身の助動詞について

—— 国立国語研究所 村 石 昭 三

受身の助動詞（れる、られる）が表現者と受け手との
 どんな心理と効果をねらつて使われるものかを考えた。
 そこで言語場面を新聞の報道、評論、小説記事と小学一
 年作文集、話しことばとしての日常会話とし、それらの
 中で使われる受身の助動詞を収録し、統計的意味的検討
 をした。その結果その使用率は新聞記事が平均一一五・
 六九字の文中に一箇で最高、以下新聞評論、新聞小説、
 作文集、会話の順であつた。次に意味論上受身の助動詞
 を客観的表現及び心理的表現の二種に分け使用率を言語
 場面別に百分率で表わすと、客観的表現は報道九七・六
 評論八二・一、小説四〇・七、会話一〇・五、作文〇。
 心理的表現は作文一〇〇、会話八九・五、小説五九・三
 評論一七・九、報道二・四となる。この調査結果を基に
 して受身の助動詞に関する総合的結論として、以下のこ
 とが考えられた。(1)受身の助動詞は意味論上、客観的、
 心理的表現の二種に分類できる。後者はただ利害関係の
 受身とのみ限られない。(2)両種とも本質的には記述表現
 上、客観的間接的立場にあるから過去、未来における事
 象表現に多く使われる。話しことばにあまり使われない
 のもそのためである。(3)客観的表現としての受身の助動
 詞は表現技巧の一として表現者が表現内容に主観、個性
 を含ませる必要がなかつたり、科学的客観的であるべき
 言語場面にとりわけ必要になる。(4)心理的表現としての
 受身の助動詞は場への適応の一として文主が非力的に他
 人の生活体なり事象なりと不均衡な事態におかれた際、文
 主の心理的抵抗、欲求充足の表現として小説、作文、会
 話特に不当な行為を蒙る者の当該事項に関する説明記述

にとりわけ必要となる。(5)受身の助動詞は意味論上、客
 観的と主観的との排反的性格をもつために表現者の省略
 とあいまつて意識的に受け手の思考を混乱させて判断を
 誤ませたり、心理的葛藤場面の構成、主客の転倒によ
 り、美的ふんいきをかもしだす効果を持つ。

(17) 両親の立場から見た教師の

人格的特性

熊本大学 葛 谷 隆 正

1 問題 児童生徒の両親が如何なる特質特性を教師
 に望むかを明かにすること。
 2 方法 小学校一年から中学校三年までの男児の父
 母夫々四八〇、四七七合計九五七名。女児の父母夫々五
 〇五、四九三合計九九八名合せて一九五五名についてど
 んな特性の先生が望ましくどんな特性の先生が望ましく
 ないと考えるか五つだけ挙げるよう要求した。熊本市内
 では小、中学夫々三校、郡部からは中学三校を選んで両
 者の比較を試みた。

3 回答された特性を身体的、知的、情意的、社会的
 教職的の五項目に分類した。相対的得点 $(\frac{100}{5n})$ からみ
 ると、(1)情意的特性が小中学校何れの父母にも圧倒的に
 重視されている。(2)小学校の父母と郡部中学の父母は極
 めて類似した傾向を示し、望ましい特性では共に教職的
 社会的、知的、身体的の順、望ましくないのは社会的、
 教職的、知的、身体的の順である。市内中学の父母では
 常に知的特性が高い。(3)教師の特性に対する関心度は市
 内中学の父母が最も高く、市内小学、郡部中学の父母の
 順となる。又母は父に比し概して関心度が低い。(4)関心
 度の変化を小学一年から中学三年までについてみると直
 線的に高まるのでなく上下動の波状形を示し、その動揺
 は上級になる程大きいようである。(5)望ましいとする特

性を総頻数順に挙げると、公平無私、明朗快活、愛情、
 教育的熱情、健康、児童生徒の個性即応の教育能力、人
 格円満高潔……となり、指導法卓越、研究心、まじめ、
 思想健全等は父に高く、公平、愛情、親しみ易い、親切
 等は母に高く評価されここに性的差異が窺われる。(6)望
 ましくない特性は、不公平、感情的、素行不良、教育的
 熱情なし……となり、不公平、感情的、暴力的、理不尽
 に叱る等は母、思想極端、研究心なし、政治活動、指導
 法拙劣等は父が高い。(7)以上から望ましい教師の人格的
 特性は、(i)客観的態度、(ii)明朗で親しみ易いこと、
 (iii)愛情と理解、(iv)教職に熱心且研究的であること、
 (v)健康となり一言でいえば、心身共に健康で人間的に
 も教師としても信頼し尊敬できる円満高潔な人格性であ
 る。

(18) 好かれる教師と嫌われる教師

日本大学 長谷川 貢

これは教師が児童生徒から好かれ、または嫌われる場
 合に、そのような関係がいかなる条件によつて成立する
 ものであるかを明かにしようとする研究の一部である。
 教師に対して好き嫌いの情を持つようになる契機を調
 査するため小学校、中学校教師に過去の体験を質問する
 方式を採つた。かれらがその小学校時代または小学校卒
 業以後において好きまたは嫌いであつた教師についてそ
 のような情を持つに至つた発端の事件とその場合の印象
 とを記述することを求めたのである。被験者三二九名う
 ち男子一九九名女子一三〇名。また小学校時代を記述す
 るもの二二二名、中学校時代を記述するもの一〇七名である。
 これらの被験者のうち好きな教師と嫌いな教師を記し
 たものは全員の八一%、好きな教師だけを記したものと
 四%嫌いな教師だけを記したものと五%である。好嫌いず

れかだけを挙げたものの割合は小学校時代の方が多し。
被験者によつて挙げられた教師は五八五名に上り、うち好かれた教師五四四、嫌われた教師四六六である。男子が好きであるという男教師は四七％、女教師は六％。女子が好きであるという男教師二六％、女教師二九％である。男子が嫌いであるという男教師四一％、女教師六％に對し女子が嫌いであるという男教師二四％女教師二〇％である。つまり女子では、男女教師が殆ど同等に好嫌の對象となつているのに男子では女教師は殆どその對象になつていない。

好きとなつた契機としては小学校時代では(1)学習指導の良好、(2)賞讃、(3)援護(貧しい友に旅費を出して連れて行く、シャツを洗つて貰うなど)、(4)認める(学芸会に出場させられたなど)、(5)容姿、また中学校時代では(1)学習指導の良好、(2)言動、(3)認める、(4)学究、(5)賞讃などが多い。嫌いとなつた契機としては小学校時代では(1)体罰、(2)不公平、(3)不当処罰、(4)侮辱、(5)叱責、中学校時代では(1)体罰、(2)侮辱、(3)学習指導の不良、(4)不公平、(5)言動不良(とげのある言葉など)が多い。

教育

第一日 第三室 午前の部

(19) 学級社会に於ける下位集団形成(下位集団形成に現われた特殊児の治療と効果の考察I)

東茨城郡河和田小学校 中山四方吉

1 診断

因子別知能診断検査

道徳性診断検査
性格性診断検査

2 治療計画

イ 標準化された面接 (検査資料)
ロ 標準化されない面接 (助言資料)

3 治療過程

イ 要求阻止の状態
ロ 補償的作用の非行
ハ 転機的重要性

4 効果

イ 同一化形成の動き
ロ 人格構造への影響

(20) SCTによる共学、別学両組に於ける諸態度の集団的傾向の調査

愛知学芸大学 森 田 清

I 目的 SacksのSCTを利用して、予め統制群として設置した共学、別学両組に於ける中学校生徒の対人的諸態度を調査、比較しようとするものである。

II 方法 (1) 解釈カテゴリーの工夫。SCTによる資料の解釈は Sacks の場合は専門的であり、教育現場に於ける教師のためのものとしては実用上、不適であるため Levinson が Projective question in the study of Personality and Ideology (The Authoritarian Personality III) の中に於て用いたものを利用した。即ち、H(保守的、慣習的態度)、L(進歩的、創造的態度)、N(中立的立場)に大きく分類した。

III 手続 (1)、刺戟材料。SCT、六〇問の中で異性、知人、友人、学友、学校に於ける上位者、監督的立場に對する諸態度、項目各四問、二〇題に對する反応をまとめてみた。(2)、被験者。附属中学第二学年生徒、共学組(男五二名、女四七名)と別学組(男四九名、女四八名)で入学当初より知能、学力、家庭状況等の諸条件を考慮して統制群、実験群に分けた。(3)、実施 四組とも一齋に監督教官の下で実施されたが、指示、無記名用紙の工夫や時間等に種々の考慮がなされた。

IV 結果 (1)、異性、友人、学友、上位者、監督者に對する態度及び其等の総計に於ても有意差は認められなかつた。(2)、然し、H及びN・1の反応数に於ては共学組が別学組に比して何れの場合でも大であつた。L及びN・2の反応数は共学組は別学組よりも劣つた。

V 示唆 共学、別学組織より厳密に条件づければ現在の此の状況下に於ては両グループ間に有意の差が生ずるものと思われる。此の事は共学組には保守的、慣習的且つ外向的に対応する機会の多く存することを意味し、別学組には自己追求的且つ内面葛藤的態度の機会の大なることを意味する。但し、指導による可陶性の大小の問題は此の限りではない。

(21) 学級指導による問題点

東京学芸大学 佐藤 正

被験者は東京都小学校教員男女計一七一名を用い、質問紙法により、指導の問題を調査した。

主なる問題は以下の様なものである。(数字は実数を示す。)

(1) 基本的問題

校務多忙八五、教具教材等学習環境の不備三六、クラス的人员が多すぎる三四。

(2) 学習指導について

学力の差の問題一〇五、討議法の問題六〇、家庭社会

の環境から来る問題二〇、性格的問題一九、男女差七。

(3) 生活指導について

家庭の問題四六、社会性の問題三三、学習態度三一、知能二六、身体一七、感情一一、性格四一。

(4) 運営指導について

学級委員選挙三六、学級委員四二、自治活動二八。

(5) 季節的指導について

季節的に好ましくない遊びの指導、季節の変化と学習等の問題を含む一般の問題二五。夏に関する問題(雨が降ると休む子、夏休みの学習指導等)四一。秋に関する問題(秋の行事と授業時間等)三六。冬に関する問題(スノーボードと授業、冬の遊び等)三七。

(22) 数学学習に関する実験的研究

——算数用語の理解と学力に就いて——

佐賀大学 副島羊吉郎

一、研究目的

算数の学習に於いて、算数に使用される用語が、よく理解されている事は、極めて大切な事と考えられる、本研究に於いて、この算数の用語の理解度はどの程度なのかを明にしそれと算数成績との関係を突きとめるのが目的である。

二、方法

S県下の都市の小学校一校、農村の小学校一校を選び四年生以上の生徒六八二名に於いて、算数教科書及び指導要領を参考にして、教科書の中から用語若干をえらび予備テストによつて、生徒の誤り易いと思われる用語を選択して、これを選択法、組合法、図示法等によつて、問題を作り上げた。四年生には三年以下の範囲で、五年は四年以下、六年は五年以下の範囲で作製した。

三、結果

全体の平均得点は、四年六一点、五年五七点、六年五

九点で、成績は余り良好なものではない。四、五、六年

生を通じて成績不良なものは、ばい(倍)位取り、小数点、

道のり、等分、距離である。五年生の方で特に悪いの

は、単位分数である。特に農村では、理解して居る者が

二、三パーセントに過ぎない低調さである。六年生では

平行線、縮図、拡大図、鉛直線等の用語が悪い。

算数成績とこの用語の理解度との関係は、相関係数が

〇・六五で可成り高い。即ち算数の学業不振の大きな原

因が、用語の不理解にある事が分る。

四、結論

(1) 小学校に於ける算数用語の理解は、楽観すべき状態

にあるとは言えない。

(2) 算数用語の不理解が、算数の学習に於ける大きな障

害になつて居る様である。

(23) 農山漁村中学生の職業

希望傾向

岩手大学 熊倉弘

この研究は岩手県下の中学生の職業意識の問題中希望職業の傾向の実態を明らかにすることを中心目標としたものである。

調査方法として「就職希望調査用紙」を用いた。調査

地域は、米作中心地帯、都市近郊地帯、農山村形態地帯、

山村地帯、農漁村形態地帯の五地帯、一年生五三三名、

(男二五九、女二七四)、三年生五九九名(男三〇一、女

二九八)、総計一、一三二名を対象とした。

結論として得られた諸事項の中、主要なものは、次の

通りである。

(1) 希望職業の傾向

一年男 工的技术職業三六・七%、交通的職業一七・四

%農林水産関係職業一三・五%、自由職業一一・六%、

三年男 工的技术職業三三・六%、交通的職業二四・六

%、農林水産関係職業一五・六%、自由職業九・九%。

一年女 工的技术職業四三・八%、自由職業二〇・四%

商的職業一七・二%

三年女 工的技术職業四〇・六%、自由職業一七・一%、

事務的職業一二・七%、商的職業一二・四%

(2) 希望職業の地域差は、男子の場合、小分類的職業に

おいて認められたが女子の場合は認められなかつた。

(3) 家庭の職業と、希望職業との間には、あまり密接な

関係はなく、女子の場合には、家庭の職業から離反す

る傾向が強い。

(4) 進学希望者の希望職業は、男女共に自由職業、事務

的職業を選定しているのに対して、就職希望者は、男

子では工的技术職業、交通的職業であり、女子は商的

職業を選定している。

(5) 希望職業の男女差は明瞭であり、また学年差も多少

認められた。

(6) 長男と次・三男(長男以外のもの)とでは希望職業

に三年生男子の場合、明瞭に認められた。即ち前者は

自家就職的性格が強いのに對して、後者では、他に就

職する性格(ほとんど大工とか交通的職業)の職業が

強い。

(24) 教育映画の構成と利用 (1)

——研究の方法について——

日本映画教育研究会

東京工業大学 宇留野藤雄

文部省 ○大内茂男

法政大学 鈴木幹人

本研究の目的は、教育映画の構成と表現をどのように

したら、その意図する教育機能を最大に發揮できるか、さらにその作品をどのように利用したら最も教育的効果をあげることができるかについて、分析的に検討し、構成と利用における科学的基準を確立して、今後における教育映画の構成と利用の技術の向上に資せんとするものである。特に、児童生徒を対象とする教育映画構成のための基準を確立すること、すなわち児童生徒向き映画の文法の確立に主力を注ぎたい。

学習心理学者 Howland などは、映画の教育効果に関するものとして Population variables, Film variables

および External variables の三種の変数をあげているが、この研究においては特に Film variables に当る (A) 各画面の表現 (一、画面にもられる主要事象の意味、性格、身近さ、二、主要事象の距離と角度、三、主要事象の提示のしかたを中心とする画面のあり方——構図、色調、明暗、運動量——四、画面の長さ、五、画面の全体の中における、および前後との連関における位置、など) (B) 画面系列 (画面接続の順位や転換、省略のしかた、など) (C) 音響 (一、音響の意味、性格、強さ、持続時間、二、音響の画面および画面系列との結びつき方) (D) 解説 (一、解説の内容、音響的性格、強さ、持続時間、二、解説の画面および画面系列との結びつき方) などを問題にする。また External variables に当る利用のしかたについても、併せて研究する予定である。

題材としては、まず理科教材映画をとり上げ、次いで社会科教材映画、児童劇映画に範囲を広めていき、対象とする児童生徒については、まず小学校高学年児童について行い、次いで上下の年齢段階に広げていく。

テストフィルムは既成の作品の中から最適のものを選んで使用し、反応や効果の測定結果に基づきつつ、この再編集や改修をしながら研究を進める。反応測定の方法としては、作文、質問紙、テスト、観察、面接、集団討議

などによるほか、プログラム分析器や GSR 測定器もフルに使い分ける。なお実際の教室における単元学習の場面についても実験を行う予定である。

(25) 教育映画の構成と利用 (2)

— 予備的実験 —

日本映画教育研究会

東京工業大学 宇留野藤男

文 部 省 大内 茂男

法政大学 ○鈴木 幹人

三つの異つた条件の教育映画を三群の児童たちにあたえ、それらをどの様に理解するかということと比較的にみることによつて、教育映画の問題点をさぐることを目的とした。用いられた材料は (一)「冬を越す木の芽」トキー版二〇〇呎、(二)「冬の芽」サイレント版四〇〇呎で (三)は (二) から再編成されたものである。そして、三条件即ち、(一)を用い音楽解説等音の入らないもの (A) と、入つたもの (C)、及び (二)を用いる (B) が用意された。被験者は東京世田ヶ谷区の小学校三校の五年生男女を用い S 校に (A)、T 校に (B)、N 校に (C) の映画をみせた後、今見た映画がどの様な内容であつたか、三〇分間で作文を書かせた。結果は S 校五一名、N 校五五名、T 校四九名のものについてみる。比較的正確に内容の把握されたのは、N 校五六・四%、T 校七五・六% の順で C 材料によるものが最高であつた。この映画の理解の上に大切な冬の準備の項目への頻度は僅少ではあるが T 校が高く、映画の理解の上に解説の役割が大ききことは云うまでもないがそれは必ずしも解説の挿入された箇所頻度が集中するといふ明瞭なものでもなく、又フィルムの長さによつて単に理解の深淺は決定されていない。そして各項目への頻度の集中も全体の長さに対する比率の高いもの

の順という訳ではない。それ故映画系列の順序を比較的正確に理解するためには、画面にもられる主要事象の身近さ、提示の仕方、運動量持続時間、画面系列の結びつき方および解説の内容等に問題があるのではなからうかということが出来よう。

(26) A 式色彩適性検査 KFM 40

Hue Test (第一報告)

(1) 原理、妥当性及び信頼度

茨城大学 ○木村 俊夫

茨城大学 菊池 哲彦

目的 色彩調節の普及について色彩弁別力の優劣の判定を必要とする職種が急増した。

上記の必要に應ずるものとして既に米国では FM 100 Hue Test が登場している。しかしその高価性(約千万円)と便宜性からして、我が国には普及しがたい。その欠点を補うものとして考案試作されたのが KFM 40 Hue Test である。

原理 色彩感覚の三属性を個別に分解し、明度及び彩度を共通とし、色相のみ等感覚差を以て連続的に変化する色片数個を順序不同にして被検者に与え、これを一定の順序に配列せしめ、その配列順位を検して被検者の弁色能を評価する。

用具 色片は Munsell Book of Color (色環四〇分割) の 4/4 即ち明度六、彩度四。これを四象限に分割し、その両端の色片を標識として被検者に与える。

条件 照明は青空光の入る窓際で、照度分布は均等とする。配列の要する時間は一象限一分以内。

評価法

色相指数 = $\frac{80}{粗点合計} \times 100$

色相偏差値 = $\frac{\text{粗点合計平均} - \text{個人粗点合計}}{1/10 \text{ 標準偏差}} + 50$

色覚型の判定 粗点により作成した輪状プロフィールのタイプによつて判定。

妥当性

- (1) 原理的には極めて大なる妥当性を持つ。
- (2) しかし色環四〇分割の $\frac{1}{4}$ の一象限一〇色相では些かやさしすぎるほか、色覚型の現われ方が乏しい。

信頼性

- (1) 原理的には極めて大なる信頼性を有する。
- (2) しかし色環分割の $\frac{1}{4}$ の一象限一〇色相では、再検査による相関係数は中学三年男子で +0.344、女子で +0.492 である。色覚型の判定は緑色盲一〇例中八例までは判定できるが、色盲と色弱の判定は些か困難である。

結論

- (1) $\frac{1}{4}$ とすれば一象限二〇色相が必要である。
- (2) 色環四〇分割で一象限一〇色相とすれば $\frac{1}{4}$ 位が必要である。

附言 FM 100 Hue Test は、実は色環八五分割で 5/5 である。

(27) A 式色彩適性検査 KFM 40

Hue Test (第一報告)

(2) 色彩弁別力の年齢的発達

- 茨城大学 木村 俊夫
- 立石中学 杉田 尙
- 明正中学 井上 国秋
- 仲小路幼稚園 今橋みや子

目的 A 式色彩適性検査の妥当性及び発達の検討。
方法 用具及条件は発表(1)と同じである。被験者は幼

稚園より大学までの被教育者のみを扱った。高等学校及小学校は一年とびにえらび、一集団を二五名とした。又被験者には石原式色盲検査票により、正常者のみを取り扱い知能程度も中等位を選んだ。

結果 幼稚園から小学校五年まではほぼ年齢に比例して、女子では五五・二、六二・一、八〇・八、八六・五

男子では五三・三、六二・九、七〇・三、八七・一、と色相指数は上昇するがそれ以上の年齢的発達は認められない。更に男女の差はほとんど認められない。幼稚園児の指数五五と云う結果からみて本テスト用具が少しやさしすぎると思われる。今後この点を考慮してより正確なデータをとりたいと思つてゐる。

(28) A 式色彩適性検査 KFM 40

Hue Test (第一報告)

(3) 色彩弁別力の職業的差異

- 茨城大学 木村 俊夫
- 東京配色研究所 佐藤 亘 広

目的 色相の弁別能力は訓練によつて向上するものであるか否か、また A 式検査器の妥当性。

経過 A 式検査器用具の色片 Munsell Book of Color

明度六、彩度四、等価値色四〇色相を発表者作色、職業別の人員を対象に検査を実施。

結果 A 群は色彩弁別能力の訓練を職場に於て経て来た者、B 群は特別な訓練を經ていない者で、色彩指数は

- 日本油脂(A)九一・九、川崎工場(B)六九・三、高島屋(A)八三・九、東京支店(B)八〇・〇、武蔵野美術(A)九三・〇、茨城大学(B)九〇・二、東京編物学院(A)九〇・六、茨城大学九二・四、となつた。この結果、職場において色彩弁別の訓練を行つてゐる所謂色彩経験者

は KFM 40 Hue Test No. 1 においては指数が大きく

現われる傾向があると云える。検査の結果、色相の弁別は被験者の全体を通じて案外細かく、更にならべ方の要領のよいものは誤数が小さい。

異常

第一日 第四室 午前部

(29) 保安大学校学生の神経質傾向について

- 保安大学校衛生課 近 喰 秀 大
- 日 本 大 学 〇大 村 政 男

I 神経質の構成因子

こゝでは神経質(Nervousness)を、強迫・過敏・内気および抑制された想像の四つの因子に分けて考へて見た。この因子は鶴孝之の「情緒性検査に含まれてゐるヴェクトル因子について」を参考にしたものである。診断票は四〇問の質問から成り、各因子と総合的視点との五つの面から神経質傾向を予診できるようになつてゐる。

II 保安大学校学生群の神経質傾向について

保安大学校の学生は一般の男子大学生よりもはるかに低い傾向を示した。仮に平均値の両側に 1・S・D の範囲をとりそれから脱逸した上限の範囲を情緒不安定の適応不良者とする、その頻度はおおむね次のとおりであつた。(括弧のなかは一般学生の頻度を示す。)

- 強迫 二・七八%(二二・八〇%)、過敏 一〇・三七%(一五・二〇%)、内気 〇・七六%(一三・二〇%)、抑制された想像 二・〇二%(一六・〇〇%)となり、総合的視点に立つた場合は 一・五二%(一三・〇〇%)となつてゐる。

この結果は当然脱逸した下限の範囲に頻度の増大をも

たらしめている。この下限の範囲に属するものの特性については明かではない。もしも異常な無感動性さえ見出せなかつたら強固なパーソナリティを持つものである。保安大学校学生群の特徴としてうかがえるものは他の因子よりも過激性が強い傾向を示したことである。

Ⅲ その他

保安大学の学生群は全体として非神経質的傾向を示したが、なかには軽度の追跡妄想や強い制感情感を持つているものがいた。これらの適応不良者がこの課程から脱落してしまうことはいままでのない。軽度の追跡妄想を陳述したもののなかには、この課程に入つてからそれが生じたというものが少くない。それ故個体の均衡保持(心的適応)にはそれを包摂する社会的枠組の重要性も強調されなければならないのである。

(30) 文章完成法の一分析

栃木県教育委員会 島田茂男

I 研究目的

本研究は文章完成法の信頼度特にテストに表現されたV・Pのポジティブ、ネガティブな感情態度が果してV・P自身のものであるかどうか検討せんとしたものである。

II 方法

- (1) V・P四九人、男二〇人、女二九人、年齢平均二三歳二ヶ月、小学校助教諭
- (2) 未完成文章はサックス (Sacks J. M.) ロッター (Rotter J. B.) を参考にしテスト条件も大体これに準拠した。
- (3) 信頼度の検討として、宇都宮氏案向性検査及び正本正編教育心理学実習中にある悩みの調査を参考にした。此の調査はS・C・T終了後一週間を経て実施した。

即ちS・C・Tの結果をネガティブ・ポジティブな感情態度の表出されているものと中性的とに大別し、向性検査に含まれるそれ等の感情態度に該当する項目及び悩みというネガティブな感情態度を調査したものと関係修正公式・検定公式及び質的な見地から分析していった。

III 結果

V・Pが少いこと、S・C・Tの項目が少いことからはつきりしたことは言えないが大体次のようにまとめられた。

- (1) S・C・TにはV・Pの感情態度が表現され得るものであり有意義なテストである。
- (2) S・C・Tに反復して、あらわれるネガティブな感情態度はV・Pの持つ感情態度として信頼度大であり、V・Pのフラストレーションと関係するもののようなものである。
- (3) 「彼」という三人称を主語としその内容を完成する如き文章完成項目は、そこに表現されている彼の内容とV・Pの内容とに関して一致度(信頼度)が薄い。

(31) 犯罪少年の知能について

水戸少年鑑別所 小倉胤雄

昭和二六年から昭和二七年の間に犯罪の結果、全国の少年鑑別所に入所した少年二、一九七名について、その知能を調査したところを概括的に発表すると次の通りである。

I 知能指数の分布状態を観察すると、犯罪少年は知能段階「中の下」が最も多く、全体の三八%を占めている。而して「中の上」以上は全体の六・四%に過ぎないが、「中の下」以下は七〇・四%を占めている。これは犯罪少年の知能が低いことを示すものである。なおカル

ドウェルと筆者の調査を比較した場合においても、I・Q七五以下の犯罪少年においては、カルドウェルでは三五・八%、筆者では三〇%が含まれ、I・Q七五以下の普通少年においては、ターマンでは二・六%、筆者では六・八%が含まれているのであつて、明らかに犯罪少年のなかには知能の低い者が多いと云わざるを得ない。

II 次に精神薄弱の程度を観察すると、犯罪少年に含まれる精神薄弱の比率は、筆者の調査では一七・六%であつて、グレゴールの調査の二六・八%より九・二%少なく、ワイリヤムの一三・五%より四・一%多く、全国家庭裁判所からの鑑別請求による結果の一七・一%と殆んど同率である。一般人中に含まれる精神薄弱は二%乃至二・五%と推定されているから、犯罪少年中には相当多くの精神薄弱者が存在していると云えるのである。

III なお累犯少年の知能指数を観察すると、累犯少年と初犯少年との知能に関しては、従来各種の意見がなされているが、筆者の調査では米国の研究と同様に累犯少年の方がやや高い傾向を示したのである。すなわち犯罪少年一、一六五名につき調査した結果では初犯少年では「劣」以下が三一・八%、「中の上」以上が五・二%であるが、累犯少年では「劣」以下が二一・四%、「中の上」以上が八%であり、更に両者を比較して見ると、差は蓋然偏差値の四倍以上であつて、明らかに累犯少年の知能が高いと云えるのである。

(32) 人物と累犯

東京家庭裁判所 山本晴雄

非行少年が将来非行を反復するかどうか、詳言すればどんな人物・環境および生活史を持った少年が非行を反復し、どんな少年が反復しないかという課題は、少年の保護的処遇の中心をなすものであることはいままでもな

い。かかる観点に基づいて、知能や性格と累犯との関係を考察して見た。すなわち昭和二五年に東京家庭裁判所の決定によつて東京少年鑑別所に送附され、鑑別された少年(男)について累犯(二年以内のもの)と知能や性格との関係を調べて見ると次の通りである。

I 知能(岡部式) I・Q六九〇五〇の少年に累犯の率が高い。

II クレペリン加算検査 累犯者の率は正常型では一九%であるが、異常型では四一%であり、異常型に異犯者がより多いという傾向は否定できない。

III シュナイダー・三宅式性格的特性 一四の各特性ごとに正常組と変調組とに分け、正常組に比して変調組に累犯者の多い特性を列記すると、爽快(軽躁)・即行・自己顕示・意志欠如・爆発などであり、反対に変調組であつて累犯者の率の少いのは、内閉(非社交的)である。すなわち軽兆にして我意が強く持続性に乏しい行動派に累犯が多く、内閉型に少い傾向を示した。かように軽兆型・外向型に累犯者が多いことは、他面彼等が環境的悪条件として不良交友を持ち、その影響に雷同的な行動を起しやすいことによるものと思われる。以上の人物と累犯との関係は大体の傾向を見たものであり、個々のケースについて見ると、内向的で無感動型・偏執型のものに悪質な累犯者がしばしば見られたのである。

なお向性検査、シュナイダー・三宅式性格調査には、虚偽の回答や判定者の主観の混入を防止できないから、妥当性が十分でないことは反省しなければならぬし、少年の生活史についての考察も重要であるが、ここでは調査しなかつた。

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

(33) 非行少年の脳波(その一)

東京少年鑑別所 佐伯 克
東京少年鑑別所 岡本 栄一
東京少年鑑別所 ○山川 博臣
日本大学 山岡 淳

行動問題児の脳波に関する研究は、一九三八年 Jasper & Solomon によつてその端緒が開かれて以来、少からざる研究が今迄に発表されている。之等の研究によつて見出された所ではその多くがα波の徐波がみられており安静時に於て一見異常性が現れていない者でも数分間の有効な過呼吸により異常脳波の出現が認められる。しかも之等は癲癇性脳波殊に精神運動発作型に類似している。また事実上それ等の一部には臨床的に顕著な癲癇性性格、乃至は癲癇の精神代理症を思わせるものが証明されている。擬、脳波と年齢との関係は、一般的な身体的精神的な発達と同じく未成熟で不規則な脳波から漸次安定した波になつて行くもので概ね一五歳に於て安定した規則性が得られるのが普通である。従来行われた研究は相互比較に際して年齢がかなり不揃いであり、異常性の基準もまちまちである。またその分析法についても不満足な点が多くない。この点、今後は総合的な分析を行い且つ操作的に確定した異常の基準を見出す必要がある。脳波を質量両面から同時に記述することは困難なことが多く、臨床的には微標の印象を記述しているだけの所が多い。それらを量的に表示するのにフリーエ分析法は適確であるが臨床的に不便である。そこで重算による週期頻度分布法の原理のうち週期を六つの群にまとめ、さらに頻度の代りに振幅和で表示することにすれば客観的で妥当的だと思われる。しかし目下検証中で現在は徐波をα指数の考えを基とした出現度で表示し、併せて

微標も記述している。これは振幅を考慮せず或程度の主観が入るので上記の如く波を六つの群にわけ振幅和で表示する方法を実用化したと考へている。

(34) 非行少年の脳波(その二)

東京少年鑑別所 佐伯 克
東京少年鑑別所 ○岡本 栄一
東京少年鑑別所 山川 博臣
日本大学 山岡 淳

非行少年の脳波については、多くの研究があるが測定器の信頼度及び分析法の点で諸種の問題が含まれている。

当所の測定器は信頼度の点、条件を満たしているので波の測定法を主として採り上げ、鑑別技術への寄与を目的として上記の研究を行った。尚これは継続研究の序報がある。

期間 昭和二八年四月より昭和二八年一月まで
場所 東京少年鑑別所

対照群の一部の記録は日本大学心理学教室

脳波記録器 三栄測器製 八channel 平衡負饋還増幅回路方式、インク書きオシログラフで描記

被験者 A 行動問題少年 四〇名

情意変調著しく、自制困難な状態に至つているもの、その様態が何等かの大脳の器質的又は機能的障害の疑いがあるもの。

B 正常人 一五名、東京少年鑑別所収容少年中情意変調なき者、及び高校生

C 癲癇 一五名、東京少年鑑別所収容少年中癲癇と診断された者、及び国立東京第一病院神経科患者

測定部位 左前頭及び後頭の単極誘導
測定時 安静時、過呼吸中三分時、過呼吸後三分時

測定法 徐波を出現度で表示し、あわせて他の微標の記述をする方法

結果 1、情意変動少年の脳波は出現度に於て癲癇患者の脳波に似ている。

2、過呼吸の影響は著明である。

3、情意変動の広く認められる者は、上記の傾向が就中著明である。

(35) PGR法による供述の真偽

判別の一例

— K 駅構内便所における窃盗事件 —

東京工業大学 宇留野 藤雄

窃盗容疑の真偽を判別するため、犯行時における容疑者の行動を PGR 法によつて分析した所、後に行われた証言と一致する結果を得た。

即ち、Keeler, Reid 等の方法は呼吸、血圧を手掛りとするので長時間の測定は容疑者に生理的苦痛を与えるので、自ら質問時間及びその内容を制限せざるを得ない。又、更に直接キメテとなるような質問を發することによつて容疑者はより緊張を増加させるので、殊に、犯罪事実の潔白なるものに対しては誤診のオソレがあると考えられる。

所で、我々の用いた P・G・R 法では、長時間の測定においても、装置からする苦痛は殆んどみられない。そこで、予め実地検証及びその他の方法によつて犯行時のくわしい行動像を仮定し、間接的に行動の細部にわたつて質問を構成し、各質問に対する供述の真偽の根拠を P・G・R に求めたのであります。

勿論、この質問構或及び順序は、前記の Reid, Keeler 等の relevant-irrelevant test 及び Peak of tension test を採用したが、我々の方法では、判定の基礎とな

る質問が多くなるので、より誤診を救うものと思われる。

次に P・G・R の判定は、三人の判定者が、潜時、放射量、反射回数等を考慮して、曲線の変化にもとづいて直視的に判定し、三者の一致した結果のみを用いた。

本研究で困難を感じた事は、他の現象でも同様であるが、体の運動が曲線の変化に影響することである。我々はその都度これを照合したが、これを機械的に記録する方法を考慮している。

(36) 少年非行者の家庭補導に

ついでを試み

茨城県中央
児童相談所

遠 藤 勉

非行少年の家庭補導は絶望的なものか？ もし可能であるとすれば、同居者がどんな態度をとれば、もつとも効果的な改善ができるだろうか？ 更にその改善はいかなる過程をたどるだろうか——などについて探究したのが本研究である。補導の基本的態度と方法は、ロジャースの主張に準拠した。すなわち「有機体は刺戟を待たずして、適応・成長・自己充實の方向に動いている」という仮設に立つている。具体的に言えば同居少年にノンディレクティブ・カウンセリングの形式を採用し、これを毎晩入浴中に実施した。取扱つたケースは六で、非行内容は窃盗・浮浪・怠学・上長への反抗・夜尿などである。

これらのケースの少年たちの改善への過程はおうむね次の三段階に分けられる。

第一段階「情緒的緊迫期」これは極度の緊張状態にあり、補導者一家の權威に服従して、機械的・追従的に行動している期間である。これは約一週間続く。

第二段階「動揺期」これは包みきれぬ動揺を示し、否定的感情をまた強く表明する段階であつて、個人差があり、短いのは二ヵ月、長いのは四ヵ月にも及ぶ。この期間は家庭補導にとつて、もつとも重要な時期である。

第三段階「自立または安定期」この段階はあたかも母親に対する児童の情緒的關係の復活のように思われる。同居少年は補導者の気持を理解し、進んで喜びを与えようと努力する状態になり、次第に補導者と同一化の傾向を強くする。行動も積極的・自主的になり、個性化してくる。この段階ではディレクティブ・カウンセリングを加えるのもさしつかえなく、更にその必要を認める次第である。

以上取扱つた六ケースのうち四ケースは就職し、二ケースは家庭に復帰して中学校に登校して、いずれも安定した生活をしている。ケースはごくわずかであるが、ここに報告しておく。

(37) 少年犯罪と

Mass Communication

水戸少年鑑別所 ○ 根本 茂
水戸少年鑑別所 高 桑 益 行

我々の生活は常に集團の力動的な社會關係のなかに把えていかなければならないと思う。この前提のもとに立つて、現在の職務である少年犯罪問題を通し、その現象が一般大衆に対してなされる M・C の滲透力を知りたいと思ひ、この研究を行つたのである。M・C の分析は M・M の社會的役割を正しく評価する上の大切な問題であることはいうまでもない。少年犯罪をなくす一番の方法は、要するに大衆の自覚ではなからうか。ところが映画・ジャーナリズムその他の M・M によりなされる M・C の

働きによつて、一般大衆はどれだけ少年犯罪の問題を認識しているだろうか。以下述べるのは受け手である大衆がどんな反応を示すかという反応効果の分析である。調査対象は水戸市内小・中学校教職員一三二名と茨城大学生一七六名である。犯罪に関係のある記事を読み、映画を観たものは非常に大きな影響を受けていることが解つた。この人たちはかかる作用を受けた場合にどんな感情的反応をあらわすかという、同情的な立場に立つ率が

多いのである。またその報道内容を正しいと批判しているのを見ると、M・Cの一方的な影響を余儀なくされていることが理解される。かような影響下にある犯罪現象の分析をして見ると、大体次のような結果が得られた。すなわち犯罪の原因に就いては、環境説支持が多い。また事件数は年ごとに上昇していると答えた率が圧倒的に多い。このほか少年犯罪者の知能や経済状態などについての結果を検討すると、一方的なM・Cの影響がいかにか強いか理解されたのである。この一方的に伝達された回路を逆流して、再びマスカ化されることが、なによりも必要なことであつて、このためにはM・Cの知的水準と均衡を保つことが必要である。それには大衆の知的文化的水準が高められなければならないと思う。かくして初めてM・Cが大衆の意志を代表して、それを利用して、より教育的立場に立つて少年保護を行いうるのである。

(38) 如何にして覚醒剤中毒になつたか

総武病院 青木義治

青少年の間に急激に流行し、現在では重要な社会問題になつてきている覚醒剤中毒症に就て、特にかかる中毒症になつた直接動機は、従来しばしば研究調査されているがそのよつて来つた原因、遠因に就ては殆んど研索されて

いない。私はかかる点を明確にすることが、覚醒剤中毒症の予防乃至治療上最も重要なものではないかと考え研究に着手した。

七三例の覚醒剤中毒症中、中毒になつた遠隔因子の全く認められなかつたのは三例に過ぎず、九六%にその遠隔因子が示された。

この因子中、(1) 家庭に問題があつたと思われるもの二一例(一一・四%)で、父の犯罪、大酒、不在勝ち、妻のための家庭不和等父に関係あるものが(三九・四%)最も多く、家庭が面白くないとするものが(三六・四%)その次ぎであつた。

(2) 家庭の躰に問題があつたと思われるもの二三例(一一・五%)、内、放心無関心六、溺愛一二、圧制的八で、ここでも父に問題があると思われるものが五〇%を占めた。

(3) 終戦後の家計の変動によると思われたものは比較的(一・八%)少く、これに反し

(4) 学業に関し問題があつたと思われるもの五五例、(三二・四%)で多い。内、勉強嫌いのもの三六・七%で、成績の優秀のものは極めて少く、大部分は不良で、無断欠席、怠学者が多く、学業を中途より放棄したものが二二・四%であつたことを特に注目したい。

覚醒剤注射を行う数年前以前より、家人や教師にかくれ、煙草を喫うことを覚えていた。

(5) 職業に関するものは一九例(一一・二%)で、親に反対して上京したり、家業を好まず、転職多く、仕事にむらがあり、あき易く、又定職に就こうとせず、職のないもの等があげられた。

中毒と同列に考えられる近因に、非行犯罪に関するものがあげられる(四五例、二六・五%)。これには素行不良、とばく、不良仲間入、夜あそび、家出、窃盗等が認められた。

かかる遠隔因子に着目することが、覚醒剤中毒症の予防乃至は治療上の重要な拠点であることを特に強調したい。

(39) 誤差論と仕事の能率について

攻玉社短期大学 安東 功

I まえがき 能率の定義は(a)時間の早いこと、(b)出来映えのよいこと、(c)仕事に集中が出来、疲労感の少いこと、その他の条件の総合的比率で示される。本論は等速度の仕事に対し、誤差の大小のみにより、能率曲線を表現して見た。即ち次に記す実験から独自の能率曲線—誤差の逆数対時間—を案出した。従つて本曲線は前記(a)、(b)、(c)、以外の条件は凡てこれを屬性と見なし、極めて単純化した特殊のケースに過ぎない。であるが、これによつて凡ての場合を推究せんとするものである。

II 実験 測微鏡を使用し目測により長さ(一目盛)を切半する誤差を本器のドラムによつて精密に検出したものである。この器械は目測の誤差を1/300まで読み取り得る。実験は常に等速度で進行し、九〇分を標準として行つた。而して日時を異にした数回の実験を凡て一二等分し、各々それらを組合せて標準誤差aを算出し、その逆数 $1/a$ を縦軸にとり、時間tを横軸として図示し、次の函數式を考案した。

$$n = ce^{-at} \dots (1)$$

ここにn: 能率[1/aの値で定義(b)を表わす]、e: 自然対数の基、c: 最高能率に達する時間、a: 仕事の性質による係数、t: 個人の特質による変数。

III 能率曲線 曲線を吟味すると能率は仕事に取りかかつた当時は最悪で、t時間最高に達し次第に低下する。故にNsを錯綜区間[定義(c)の前項]、Npを疲労区間[定義(c)の後項]と名づけて見た。ここで確率曲線

を採用した理由は、バクテリアの増殖、減滅の曲線の場合を吾人の大脳細胞の覚醒、睡眠（疲労）の場合に適合せしめたのである。但し本式はこれを二つの等式に分割して考えた。

$$\text{覚醒区間 } N_s = 0.3e^{-0.1(t-0.25)^2} \quad (t-m) < 0 \dots (1_1)$$

$$\text{疲労区間 } N_h = 0.3e^{-0.1(t-0.25)^2} \quad (t-m) > 0 \dots (1_2)$$

N_s, N_h の数値はパーセンテージに変換したもので $a=0$ のとき 100% となる。 t は四五分を一として計算した。

III むすび 本曲線の利用法は、最大能率発揮の時刻を見出すことにある。

知覚・学習

第一日 第一室 午後部

(40) 色彩調和序説

——色彩調和の傾向と色差との関係

についての調査——中間報告

日本色彩研究所 細野 尙志

日本色彩研究所 ○橋本 仁司

ここに述べることは色彩調和に関する基本研究のための方法論序説である。

一、従来の色彩調和論の検討から

従来の多くの色彩調和論は経験から割出された理論で科学的総括的な取扱いでなされていないが、Moon と Spencer の研究は Metric Color Space を根拠にして色彩調和の科学的方式を立てている点優れているが、多少不備な点がある。そこで本研究は細密な統計的調査を基にし、そこから得られる色彩調和の理論と方式を色彩学的体系によつて組織的に表示する方法を見出そうとする

のがねらいである。

二、研究問題の設定

- (1) 色彩調和反応の一般的傾向
- (2) 色彩調和の傾向と色差の関係調査
- (3) 色彩調和の傾向と色調別の関係調査
- (4) 色彩調和の傾向の理論的解析
- (5) 色彩調和の体系化

三、予備調査

(1)、(2)、(3)の調査に当り最も問題になる点は如何なる資料を用うるかであつて、調査資料は各色差別と各色調別に普遍的にかたよりなく選択された、かなり多くの数を要する。

四、結果の整理と得られた結論

- (1) 色相差のみによる傾向
- (2) 明度差のみによる傾向
- (3) 彩度差のみによる傾向
- (4) 色相差と明度差の相互関係による傾向

五、次の段階

この調査から更に色調別の傾向を検討し、その結果から最も適切な調査資料を整理選択し、それによつて多数の被験者による調査に進み、問題の(1)、(2)、(3)に挙げた事項を解決する計画である。

(41) 明暗弁別検査スケールの作成

——予備実験——

東京教育大学 小保内 虎夫

東京教育大学 ○浅見 千鶴子

一、目的 田口式ラゴリオ明度対比計を基にして我々の実際の弁別知覚と適合しない幾つかの点を修正し、より適合せる明暗弁別検査のスケールを作成する事を企てた。その予備実験結果の報告である。

二、実験方法

(a) 材料 田口氏より対比計を貸与されそのまま用いた。田口式の二九段階中、任意の五カ所を選んで実験した。(b) 被験者 東京教育大心理学専攻者延二〇名、一九五三年九月—一〇月、心理学研究室で行う。(c) 手続 観察の照明条件は、①室内屋光下(窓際)、照度約一〇〇〇 lux、②室内電燈照明下(一五〇W)、照度約五〇 lux の二種、やり方は、極限法のうちの完全上下法をとつた。

三、結果

実験計画法に従つて測定された結果(一〇人—〇判断)の最初はスケール段階値で計算し、それを反射率値に換算する。これらについて上弁別閾(ΔR_o)及び下弁別閾(ΔR_u)を算出し平均弁別閾値を夫々の測定点の反射率(R)で除し相対弁別度($\Delta R/R$)を算出する。

ΔR と R との関係を図に示すと或種の指数函数の曲線が得られる。いわゆる弁別閾に関するWeberの法則が適用されていると原点を通りある角度をなす直線函数が示される筈である。又相対弁別度($\Delta R/R$) (Weber ratio)と反射率(R)の対数値($\log R$)との関係をみると、もしWeberの法則が適合していれば、X軸に平行な直線函数が得られる筈であるが、実測結果は之と異なり、これと或角度をなす直線が得られている。

我々の結果からいふと田口式の対比計は対数尺度が作られてある為に暗い方は我々の知覚事実に対してスケールが細か過ぎ、明るい方は粗すぎる事が明かにされた。また照明条件によつて多少観測値が異なることが示された。

以上から最も我々の知覚事実に適した明暗弁別のスケールが決定されれば、今後の知覚研究にも役立つ事と思ふのである。

(42) 乗法九九誤答の分析

——感応理論の研究——

東京教育大学 小俣内 虎夫
研究派遣生 〇森 田 良 久

一、問題 かつて小俣内、伊藤は、九九の誤答について分析を試み、それが規則的な関係に従って生起することを明らかにした。今回の報告は、これをさらに細かに分析したものである。

二、方法 被験者 乗法九九、七二問(0の段、一の段を除く)を、九九学習直後の三年生について調査した。先年の調査は口唱提出。今回の分はペーパーテストによつたものである。方法は異なるが結果に差異が認められないので、両者を合計したものについて報告する。調査人員は、四二九名、前回の分は昭和一二年度、今回のものは、昭和二七、二八年度の調査である。

三、実験結果

1. 全体的傾向

- (a) 誤答総数二七〇八、誤答率八・八%
- (b) 誤答の種類 (i) 入れ替りによる誤、(ii) 乗数被乗数の一方を答とするもの、(iii) 加法を行うもの。
- (c) これから誤答全体に見られることは、答が大きくなるに従つて誤答率が高くなるということである。
- (d) 答が小さいと過大再生、大きくなると過小再生となる。

2. 入れ替りの間隔 (例 $2 \times 6 \rightarrow 14$ は 2×7 の誤り、入れ替つた数字、間隔は一)と誤答の関係。誤答の最も大きな原因は入れ替りによる誤である。

(a) 隣接した数に入れ替りが起りやすく、間隔が離れるに従い起りにくくなる。

(b) 被乗数と乗数を比較すると前者の方が入れ替りが多い。

3. 入れ替りの誤について

四、結び 九九誤答の研究は、記憶現象の性質を明らかにする上に重要であるばかりでなく、乗法九九を指導するにあつても、多くの有益な示唆を与えるものである。

(43) 成功、失敗の影響に関する

研究—第三報告

——完了・未完了動作の再生の場合における成功失敗感について——

東京教育大学 横山 雅 臣
東京教育大学 横山 映 子

完了・未完了動作の再生に影響する要因としての被験者の抱く成功・失敗感はかなり以前から想像されてきている所である。すなわち動作を中断せしめられることによつて、失敗感を抱かせられ、これが未完了動作の再生に影響を与えるというのがこれである。

本実験は、完了・未完了動作の再生に関する一連の研究の一つとして以上の推論を実験的に検討せんとしたものである。

小学校児童(平均年齢一一歳)を被験者とし、一六種の *jig-saw picture puzzle* を課題と定め、その半数は完了前に中断せしめ、半数は完了せしめる。実験場面は *formal*、つまり、*Rosenzweig* の *stress* 事態である。課題の系列終了後再生を行わせ、次に成功、失敗、記憶、最後に快、不快記憶を報告させる。

結果の概要は次の如くである。

(1) 全体的にみると R-D score は〇・一三、すなわち

完了作業の recall が優位である。

(2) 完了作業は成功感を、未完了作業は失敗感を伴うものが多い。

(3) 失敗感が伴う作業の recall 量が少い。

(4) 快、不快と作業の完了、未完了との関係は完了作業を快とする者が多く、不快とする者が非常に少い。又成功感を伴う作業を快とするものもかなりみられる。

(5) recall された作業を分析してみると、快作業の recall 量が最大となっている。

(6) R-D score 別、すなわち、完了作業の recall と未完了作業の recall との比率によつて被験者を二群にわけて考察すると、両者間には何ら著しい差異はみられず、従つて (R-D score 又は n/c ratio) の大小による被験者の質的な相違、例えば *Rosenzweig* らのいう *ego-defensive* と *need-persistent* とか *Frank* のいう *ego-involving* とか *task-involving* などの差はみられなかつた。

(44) 言語の感情価に関する実験

心理学的研究

——電話交換手の場合——

千葉大学 篠塚 睿

我々人間は感情の動物であるといわれているように人間生活の中には常に感情が我々の内面、外面に何かの形で表現されているのである。その感情は何によつて刺激され、何によつて表現されるのであろうか。その刺激は我々をとりまいてる総ての物から受け、そして我々の五感の総てがそれをうけとるのである。その刺激の一つとして私は此所に「言語」を用いた。その表現は各人の内観(自己観察)により記録させたのである。しかもこの「言語」は相手の姿が見えないように電話受話器によ

り聞きとつた言語に限定した。

実験の期日は第一回は昭和二八年七月一三日から八月二日まで、第二回は昭和二八年九月一〇日から一〇月九日まで、時間は大体一時間交代である。場所は千葉市に存在する、A、千葉県庁交換台、B、千葉市役所交換台、C、千葉大学交換台の三箇所。人員、各交換台の交代人員を含めて一日平均二十七人の交換手。

方法 A、第一回は七月一三日より八月二日まで各交換手に交代で台に入る時に各人の状態を記入させ、その台に入っている間に感じた言語をここに記入させた。B、第二回は九月一〇日から一〇月九日まで実施し前回と同じ方法。C、次に一日の内の度数分布を知るのには毎月電話局へ報告している用紙は不便であつたので内線、外線の別に男女別の感じの良、普通、不良の三段階に分けてとつたのである。

結果 A、感じの良い言葉、B、感じの悪い言葉、C、感じの良い言葉と感じの悪い言葉との出て来る比率は明瞭である。感じの良いのは外線の女子で、感じの悪いのは内線の女子であることが分つた。D、感じの良し悪しに関する一日の度数分布、特に本人(交換手)の各種条件とを考へ合せてみる必要があると考へられる。

今後このような言語を出来る限り多く蒐集してこれに対する感情価の決定をして見たいと考へている。

職業指導

第一日 第二室 午後部

(45) 疲労における意志の変容

日本女子大学 金子秀彬

郵政医事研究所 小松澄子

心理的生理的疲労測定においては、疲労により機能が

低下するから機能の測定によつて疲労度を判定しようとしてゐる。疲労により作業量が減退することは確かであるが、果して作業量の減退が機能の低下に基づくものであるか否かには少からず疑問がある。機能が直接的方法で測定し得るものにつき、疲労時の機能を測定すると、機能が疲労に関係してゐないことがみられる。例えば膝蓋腱反射は刺激反応間の所要時間は疲労状態に関係なく一定である、更に多くの疲労検査は知覚判断の際の判断反応値をもつて測定値としてゐる。しかしこれは判断者の motivation と密接に関係してゐるから、この測定値が機能そのものであるとは認め難い。従つてフリッカー測定値、触弁別閾値その他の知覚を手段とする疲労測定では機能が測定されるという考方は疑問であり、心理学的にはむしろ motivation の面を考へる必要がある、又測定環境も重要な変動要因と考へられる。

この観点から機能の示標として測定値をみると、意志の状態として測定値をみるのと何れが客観的にみられた疲労の状態と併行するかを視聴協応作業によつて考察した。協応作業は速度 29ms 1cm² 左→右に指針が○ ↓一六の目盛の上を走る。目盛の大きさは 1cm 間隔、目盛盤は多少被験者に対して凸、被験者の位置は目盛盤前 70cm。目盛盤上を指針が走るとき五個所の位置のうち一個所で音刺激が出される。位置は無作意順序、被験者はある時は目盛五を注視しながら音刺激の位置を報告し、あるときは目盛一一を注視して報告する。一般に目盛五より目盛一一を注視する方が音刺激の位置は右(多い方)に傾く、この二つの態度を意志的にとるとき両判断に差が大きいくでると予想されることから判断値の差の大きさは意志力の函数と考へられる。この測定値は機能(判断の誤差)による指数より実際の観察された疲労状態とよりよく併行していることが認められた。

(46) 学校教育に対する職場の要望

西京大学 坂田 一

中学卒の半数を占める就職希望者の大部分が都市企業へ生活の活路を求めてゐるとみてよい。彼らの受容先である産業経営者が学校教育に対し、如何に批判し、何を要望してゐるかを打診することは、職業指導上重要な問題である。質問紙による面接法で、大、中、小三段階の七二事業体を調査した。

結論 (1) 大、中事業体では高校卒採用希望が多く、

小事業体では中学卒希望が圧倒的に多い。採用の理由は、高校卒は知識、技能、態度及び労働基準法の抵触を避けるため、中学卒は低賃金、使いやすい、自家養成などである。

以下中学卒について専ら調査した結果である。

(2) 一般常識は年齢相応である。知識技能中、特に数学を筆頭に、道徳、国語、理科、工業、工作、商業の順に重要視してゐる。

(3) 教育効果への期待は、大企業は長い目でみたいとし、小企業になるほどすぐにも役立つ欲しいとする。

(4) 人格教育では、集団訓練、きちょうめん、批判力、感謝の気持、奉仕的精神、勤労意欲が長所とされ、道徳教育と社会的認識が重視されるべきだとする。

(5) 仕事に対する教育は、職業教育が役立つていないし、職業常識が少いとする。徹底的に専門化した職人養成の技術指導を避け、基礎的職業教養を身につけさせて欲しい、基礎教育の充実を要望し、一般に考へられる程功利的ではない。

(6) 職業指導の必要は経験的に強調されている。補導(追指導)は殆んど行われていない。

(7) 採用は、学校推薦が結果的によく、縁故採用が次

に、安定所はあまり歓迎されていない。

(8) 労働運動に対する関心は低調であり、経営者はそれをよるこばない。

(9) 家庭に対しては、和やかであること、正直、交友などについての関心と協力を求めている。

(10) 調査の結果、全般にパーソナリティの育成が大きくなり取り上げられているが、要請されるモラルの性格については経営者の意図する職業教育の本質についてと同様に検討と究明の要がある。

(47) オーストラリアにおける

職業訓練の傾向

労働省 村中兼松

オーストラリアでは六ヶ年の初等教育終了後、職業予備教育を与えるため数種の工業学校を設けている。ビクトリア州では中間技術証明は工業学校の四年の終りに下級技術証明は三年の終りに与えられる。ニューサウスウェルズ州では下級工業課程は三ヶ年で終了し、南オーストラリア州では三ヶ年の課程の後に技術養成に入り、技術証明課程は四ヶ年である。職業予備課程は主に探索的性質をもつていて、男子は木工金属加工、女子は裁縫、料理等を習う。これは一般教育から職業訓練、技術訓練に移る準備と適性発見を兼ねている。一般に学科は教科課程の七〇%を占め技術課程をやり通せなくなつた者は一般の高校に移ることができる。徒弟に対する Part time の補足的職業訓練は今日の上級工業学校や工業大学の最大の仕事となつている。これは、一般に工場で得た実際的訓練や経験により補足されるべきであるという原則によつてゐる。全州は技能者養成に関する法則を制定し州当局、雇用主、労働者の代表からなる特別の技能者養成委員会を設け、技術者養成に関する調整、登録、監督を行つ

ている。また各職種毎に一定の職種委員会が作られている。どの州でも徒弟を補足的訓練のため勤務時間中、工業学校の Part time の課程に出席させることを義務づけた法律、規定を作つてゐる。勤務時間中の出席は大体養成期間中に毎週二―四時間出席し、夜間の場合毎週二―四時間出席することが要請される。公立の職業訓練施設と平行して雇用主の施設で組織的な技能者養成が行われるようになった。徒弟や訓練を受ける者のために優秀な指導員や監督者のいる生産工場で追加訓練を受けることになつてゐる。一方、小さい施設も、徒弟を選定された熟練工と一しよに配置するようになった。技能者養成課程を終ると、技能者は技能者養成委員会から専門の証明書が与えられ、その後、養成を受けた工場その他に自由就職ができ、各職種に対して法律で定められた賃金以上の収入が保証される、昇進の機会を得るためには、工業大学のコース証明をとつたり、夜間のコースを利用することができる。

(48) 労働省編職業適性検査による

公共職業補導所採用基準

について

労働省 松本 洋

一、目的 標記の検査の手引書に於ては各職業群に対する所要性能の合格基準が定められているが、これは労働者が自由競争下でその職務を適切に遂行する上に必要な性能であるから、入所生に対してこれを適用すると定員充足上困難を生ずる場合が多い。それは入所を希望する新卒業生は、進学者や事務関係への就職者の残部で、比較的低能力であり、離職失業者も能力的に劣つた者が多いのである。故にこれらの者に適用する基準を作成する必要を生ずる。

二、結果 この目的に沿つた新しい基準を作成し適用したが、建築科・木工科および板金科などのように適切にいかなくなつた部門もあるが、大体成功し従来の基準より良いものが出来たようである。さらにこの基準によつて補導種目別に合・不合格の二群に技倆「上」と判定される者の出現を五%の危険率で推定すると、大体次のとおりである。(以下合格者群を優群、不合格者群を劣群としておく。)

すなわち洋裁科―優群から二七・五%―二七・七%、劣群から一・四%―三・九%。経理事務科―優群から二九・四%―二九・九%、劣群から〇・九%―五・〇%、英文タイプロ―優群から二六・四%―二七・五%、劣群から四・〇%―一・八%。和文タイプロ―優群から二一・一%―三三・〇%、劣群から一・四%―一六・二%。膳写筆耕科―優群から二七・一%―二七・九%、劣群から二・九%―一二・三%、自動車修理科―優群から二五・四%―二五・六%、劣群から三・二%―七・三%。建築科―優群から二二・六%―二三・六%、劣群から三・九%―一四・〇%。木工科―優群から二七・八%―二八・九%、劣群から一・七%―一二・二%。機械旋盤仕上科―優群から二七・四%―二八・一%、劣群から一・七%―一〇・二%。板金科―優群から二四・七%―三〇・二%、劣群から一・一%―一二・四%。溶接科―優群から二〇・二%―三六・八%、劣群から一・六%―一八・三%というよう出現するものと思われるが、劣群すなわち不合格者群から「上」と判定される者は最高の場合でも一八%強に過ぎず、新基準の妥当性を示しているのである。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

疲労

第一日 第三室 午後部

(49) 晝夜大学生疲労の比較調査

——大学基準協会委託——

(1) 序説 附環境調査

日本大学 渡 辺 徹
日本大学 ○田 中 寛 一

一、目的 夜間部学生の疲労を調査研究して、かれらの勉強条件の合理化をはかるための資料を得ること。

二、調査研究の方法 夜間部学生の疲労度を昼間部学生を対照として調査し、勉強条件の差異が疲労度に及ぼす影響を明かにするとともに、その疲労の差異を生じさせる要因をつかむために、次の諸方法を実施した。

(1) 疲労検査 (イ) 心理学的方法

(a) 加算検査 (b) 抹消検査 (c) 握力検査 (d) 点かぞえ検査 (e) 色名呼称検査

(以上五種は日本大学にて実施)

(f) 長時間実験作業における疲労調査

フリッカー値測定及び連続加算作業による

(早稲田大学にて実施)

(ロ) 生化学的方法 (早大、日大にて実施)

(a) 尿検査、尿量、尿のPH、尿の定性(蛋白およびウロビリノーゲン) 尿還元物質

(b) 唾液検査、唾液のPH

(2) 昼夜学生の実態調査

(a) 職業、(b) 収入、(c) 学業生活、(d) 家庭生活、(e) 疲労感、(f) 夜間学生のみを対象とする休日、食事、職場等の調査

早大八〇〇名、日大八〇〇名、法大四〇〇名、計二、

〇〇〇名に実施した。

(3) 環境調査

(a) 気温・湿度 (b) 照度 (c) 騒音

疲労検査と平行して、実験期間中の毎日、午前一〇時から午後八時まで二時間おきに気温・湿度、照度、騒音の程度を測定したが、日大の場合については次の通りであった。

気温は摂氏二四—二六度、湿度は九〇—八〇%で昼夜の差は認められず、照度は昼の平均が一三〇ルクス、夜の平均八〇ルクスである。騒音については、測定時によりかなりの変動がみられるが、昼夜による明瞭な差はあらわれなかつた。環境的条件と疲労との関連性については、今後の検討に俟たなければならない。

(50) (2) 心理学的方法

日本大学 ○安 藤 公 平
日本大学 大 村 政 男

一、実験方法 被験者全員(昼一六名、夜二一名)に次に述べる五種のテストを初日に実施した。これは同一条件下における成績を得て、以後の成績比較の基準とするためである。以後六日間毎日、昼間部は午後三時に、夜間部は午後八時にテストを行い、八日目に再び全員を集めて同時にテストを実施して実験を終了した。

二、実験結果 授業の行われる月曜から土曜までの昼夜学生の疲労度を比較すること、曜日による疲労度の変化をみるために、第一日の成績一〇〇%とし各個人の毎日のテスト成績を百分率の指数で表す。

(1) 加算検査 作業量(試答数)では、昼夜とも練習効果で向上を示すが、昼間部の一〇%ないし三〇%の増に比し、夜間部はわずかに一〇%以内にとどまる。作業の正確度(正答率)も夜間部は第一日に比して低下してい

る。作業量と正確度との積を以て能率の指数として、これを比較すると、更に昼夜の差がはつきり出る。特に夜間部の月曜の能率低下が顕著である。

(2) 抹消検査 作業量、正確度ともに昼夜の間に差は認められなかつた。

(3) 握力検査 昼間部にはわずかに向上が認められるが、夜間部にはそのことがない。

(4) 点かぞえ検査 所要時間は練習効果に従って昼夜とも日を追うて減少するが、夜間部の方が減少度が少い。誤りの絶対和でも同様の傾向が認められる。

(5) 色名呼称検査 所要時間も誤も昼夜の間に差は認められない。以上の五種テストについて、月—土の六日間の昼夜学生の平均成績を算出し、その差の検定を行った。加算の能率(〇・〇一%)、加算の作業量と点かぞえの所要時間(〇・〇五%)、握力と点かぞえの誤り(〇・一%)では有意の差があるといえる。これらを通観し、

昼夜学生間に、精神作業における能率に関し、ある程度の差が認められ、特に加算のように複雑な作業ほどその差が現われる。また曜日による変化は、今回の実験のみではあまり明瞭でなかつたが、夜間部では月曜と木曜あたりに能率低下の傾向が認められるものようである。

(51) (3) 生化学的方法—第一報

厚生省 小 沢 祐 保

1 生化学的検査種目

① 唾液のPH、② 尿量(二時間尿)、③ 尿のPH、④ 尿の定性(蛋白およびウロビリノーゲン)、⑤ 尿還元物質

2 生化学的検査成績

① 唾液のPHについて

昼間部学生の場合は、毎日六時限の授業を受けても、土曜日に至って始めて疲労状態があらわれる。しかし夜

間部学生の場合、毎日三時限の授業を受けるだけで、木曜日には疲労状態があらわれ土曜日には過労状態を呈する。

②尿量(一時間尿)について

夜間部学生の授業開始前の尿量が多いことが著明にあらわれている。この現象は夕食時に多量の水分を摂取したもののか?あるいは飲料水を飲んで空腹を一時的に抑えているのではなからうか?

③尿のPHについて

昼間部学生では授業前・後の尿のPHには、著しい変化が認められない。しかし夜間部学生においては、授業後の尿のPHは授業前の尿のPHと比較して酸性に傾いている。

④尿の定性(蛋白およびウロビリノーゲン)について

尿中蛋白質の増加は認められない。尿のウロビリノーゲン陽性率は、昼間部学生では授業終了後に増加し、特に木曜日を中心として、水・木・金に著明にあらわれる。夜間部学生では、授業前でも木・金・土に陽性率が増加し授業終了後では木曜日を中心として月曜日を除くすべての曜日に陽性率が増加している。

⑤尿還元物質

昼間部学生では木・土の授業前に値が増加し、水・金の授業後にも値が増加している。夜間部学生の授業前の成績では、木曜日を中心とし、すべての曜日に値が増加し、相当疲労していることがわかる。授業後は授業前に比較してすべての値が低い。すなわち夜間部学生は生体の平衡状態が破られる一歩前の状態に置かれている。

☆ ☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆ ☆

(52) (4) 学生実態調査

法政大学 鈴木幹人
日本大学 ○妻倉昌太郎

早稲田大学および日本大学の昼夜間大学生一、七五二名に対して、以下の調査事項を記載した質問紙を用い、その実態を調査した。法政大学の資料は二九八名あるが分析が完了していないので、ここでは発表しないこととする。

- A 職業調査
- B 収入調査
- C 学業生活調査
- D 家庭生活調査
- E 疲労調査
- F 夜間部学生のみの特異調査

この調査の作成に当つては、東京都教育庁総務部調査課の「定時制高等学校の実態調査」をも参考とした。記入する場合は講義時間の一部を割いて行い、記入完了後直ちに回収した。一主題についての回答が二項目以上に該当するような場合には、その総てに反応することを妨げてなかつた。従つて反応数の合計は必ずしも被検者数と一致していない。

資料の整理はおうむね次の二段階に分けて行つた。すなわち(1)大学別・昼夜別および文理別に各項目の反応数を集計し、各項目ごとに総反応数を一〇〇とした場合の各反応の百分比を算出する。これによつて項目ごとの反応を大学別昼夜別および文理別に比較検討する。(2)特に疲労と関係ありと目される項目について、その反応を相互に比較検討する。

以上の二段階に分けて行つた昼夜間大学生実態調査の研究成果の全貌は大学基準協会「会報」第二一号(昭和

二九年七月)に、「昼・夜間部学生の疲労度比較調査の報告(2)」として掲載されているから参照していただきたいと思う。

(53) (5) 長時間実験作業における疲労についての研究

早稲田大学○清原健司
早稲田大学 沢田繁

目的 一二時間拘束、一時間作業という如き条件において作業能率及びこの意味での疲労が日間、週間においてどのような変動を示すか、又個人差はどのように見られるかという問題を設定し「昼夜大学生の疲労比較調査」(大学基準協会委託)に一つの視角を得ようとした。

計画 (被験者) 大学生一二名を実験の本群とし、別に三名を比較群とした。A班六名は夕食延期、B班六名は通常の夕食時間に給与。「実験手続」九時より二時まで各一時間単位で同じ操作を繰返す。この一時間の手続は Krüppel 内田法加算作業を実施し残り時間は整理作業及び Flicker 値測定を行う。一二時より一時間中食休憩。Flicker については第一回作業開始前に Starting Flicker をとり二二時の全作業終了後一五分休憩で二回測定した。夕食給与は整理作業中にコッペパンを食べるという方式をとり自由休憩の混入を避けた。

結果 「精神作業」(1)全例において昼夜間共に週間における練習効果が見られたが夜間の練習効果は昼間に比べて劣る。(2)日間の変動は各日ともに朝の作業を最高として漸次著明に下降する傾向が見られたが(即ち練習効果は量的に見られないが)最終回作業において上昇する傾向があつた。(3)毎回作業中の五分休憩の効果は第一回

を除き大部分において認められず、特に夜間に著しい。
 [Flicker値測定] (1) 全般的に個人差が大であり又測定値の経過にも動揺が著しいので一般的傾向を見ることが困難である。(2) 比較的各種条件が同じであるB班についてみると日間変動では従来の諸研究の如く動揺はあるが午前より夜間へ下降している。終末の休憩中測定値は若干上昇する。週間変動は緩徐な凹型を示す。(3) 昼夜を比較すると週間変動を実測値平均の経過でとると大体同じようであるが夜間の方が大なる変動を示す。

検査 I

第一日 第四室 午後各部

(54) 標準読書力診断テストの

概要とその結果の考察

東京学芸大学 阪本 一郎

東京学芸大学 ○齊藤 義夫

一、本テストの概要

本テストは読書力テストの一部で、小学四年～高校三年用である。

テストの構成は、(1)速読テスト、(2)読解テスト、(3)読字テスト、(4)単語テストの4 Sub-Testsよりなり、更に読解の正確度も算出できる。解答は時間制限法と作業制限法とを併用する。得点の結果は読解力偏差値で表わすのを本旨とするが、発達年齢を示してあるので読解力指数(Reading Quotient)も算出でき、更に成就値、成就指数、学力相当学年等も表現できる。なお、各 Sub-Tests ごとに発達年齢が精しく表現できるので、これによつて読解力発達のプロフィールが描け診断に利用できる。

二、標準化の結果とその考察

標準化は全国的な規模の下に大・中・小都市、農村を

選り約四、五〇〇名の被験者に行つた。実施時期は昭和二十七年一月より二八年三月にわたる。

- (1) 学年別の得点上昇はおおむね凹凸なく、また高原状もなく、平均した発達曲線を示す。
- (2) 標準偏差は同種の学校内においては学年を追つて増加するが小六より中一が、中三より高一が小さい。
- (3) 地域差は相当にある(偏差値は七〇)が男女差はほとんどない。しかし多少、小六以後は男子が優る。
- (4) 小テスト相互間の相関は読解力が高く、速解力に低い。

(5) 本テストと知能テストとの関係は田中B式よりA式に高く、平均値と標準偏差は近似している。相関係数は小四、五年で、〇・七〇・八、中学で〇・四八〇・六三である。

(6) 読書能力の発達に及ぼす図書館教育の影響は、厳密な意味では測定しがたいが、一般に学年が進むにつれて大きく、各 Sub-tests は読字に著しく、次いで単語読解、速読、の順である。

(7) 正確度は小五に著しい上昇を示し高校は平均が九〇～九七%で極めて高い。

(55) 学習興味測定を試み—第二報告—

田中教育研究所 鈴木 清
 田中教育研究所 間 宮 武
 田中教育研究所 品川 不二郎
 田中教育研究所 ○辰 見 敏 夫

1 この実験の目的

この実験は第一報の学習興味診断テストの第二報をなすものであつて、第二報においては児童・生徒の学力不振の原因を診断することを目的とするが、本報告の第一部は児童・生徒がいかなる教科目に興味を持っているか

及びその相対的強度について、診断することを目的としている。

2 この方法の特徴

従来、学習興味の問題は大いにモティベーションの問題から取り上げられ、種々の試みのもとに学習興味を測定しようとする試みがなされた。その主な特徴は各教科別にその教科そのものをお互いに比較するという方法がとられていた。一方アメリカにおいても教科ではないが、科学の分類に従つて社会科学、自然科学、実務等々に対していかなる興味を持たれているかを、その科学相互を比較するというわけではなく、各科学の内容を取り上げ、その内容の興味の比較によつてきめていこうとする方法がとられた。

本テストでは、この後者の考えにのつとり、興味の範囲としては小・中学校の各教科をとり、さらに、問題場面を設定して、その反応によつて児童・生徒の興味の方向を客観的に決定しようとするわけである。

したがつて、本テストのような場合には、テスト問題の妥当性、つまり、各問題がうまく各教科を代表しているかどうか問題になるわけである。この点については十分の考慮を払い、小・中学校の教師九名以上がたしかに全員一致をしたもの、最低においても八〇%の一致を見たものを問題として採用した。

3 結果の一部の報告

そこで、本テストにおいては、大・中・小都市、農村の各地にわたり二千名以上に試行をした。この発表はその一部であつて、小都市の中学校・小学校のものをしめたものである。

☆ ☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆ ☆

(56) 教研式学年別知能検査成績
と学業成績との比較研究

東京教育大学 堀 辰 己
東京教育大学 平 沼 良
東京教育大学 八 野 正 男

教研式学年別知能検査の特色については前回平沼良氏より発表されましたが、私はそれによつての測定成績について申述べ御批判を乞う。

さてこの資料は本年九月中旬栃木県那須郡において全郡に亘り教研式標準学力テスト小学校用国語算数及び教研式学年別知能テストを実施した。その中より八校児童数一、七十四人を抽出して集計したものである。

(1) その成績は、三―六年の学力偏差値(二科平均)は四九、知能偏差値は四九、AQは一〇〇で、全国標準よりやや劣る部分もあるが、町村の児童としては学年相当の成績である。AQはフランチェンの提唱する成就指数による。

(2) 知能と学業成績との相関関係は、三年の〇・七六五、四年の〇・六七二、五年の〇・七九一、六年の〇・七三四と、概してかなり高い相関係数のあることが認められた。

(3) AQの分布状態であるが、AQの平均値MにAQの標準偏差σを加えたもの及び減じたものの区間を正常とし、それ以上と以下をそれぞれ優、劣として三区区分した。三―六年で優は一八、正常は七四、劣は八である。(この数字は%である)これによつて見れば正常のもの七四%であつてやや劣るのではないかと考えられる。

(4) 知能の各区分に対してAQが如何なる分布をなすか即ち両者の関連を見たのである。

知能とAQが優は〇・一%、知能とAQが正常は五八・七%、知能とAQが劣は〇・一%、知能が正常でAQが優は五・一%、知能が劣でAQが優は一三・五%、知能が優でAQが正常は一三・〇%、知能が優でAQが劣は三・八%、知能が正常でAQが劣は三・四%、知能が劣でAQが正常は三・三%である。

これによつて見るに、知能の優のものがAQは劣のものよりその率が小となつてゐる。この状態は普通多く見る状態ではあるが直接指導の任に当る者は注意を要すべき点であると思ふのである。

(57) 音楽鑑識テストの追実験

共立女子大学 玉 岡 忍

さきに発表したマルタ・ヴィドールの音楽テストの追実験である。今回は、第一テスト即ちメロディーの完成と、第二テスト即ちリズムの旋律化とを、芸術大学の委託学生に試みた。学生数は、作曲科七、音楽科一九、ピアノ科二〇、器楽科八、楽理科二、計五六名である。

結果

- 一、第一テスト(四月下旬実施)
 - 1、前回の一般大学生よりよく、解決しない者、誤つた解決をした者は一名もない。
 - 2、解決はその殆んどが基音で行つた。
 - 3、楽譜上の誤りは、ピアノ科に四名。
 - 4、メロディーの巧妙さもかなりで、全体との釣合がとれている者が大部分である。
 - 5、小節の数は最小限二小節(二五名)最大限六小節(六名)の開きがあつた。
 - 6、曲の構成の様式には、かなりの類似性があり、或る形式は二四例が用いていた。
 - 7、専攻別の差は著しいものは見られない。

二、第二テストの再実験
一月上旬に、同じテストを同じ被験者(五六名中二七名)に行つて、半年間の音楽教育の効果を見ようとした。

- 1、全体として、作曲即ちメロディーの構成振りがよくなつた。(一七名は顕著)
 - 2、前回と完全に同じものはないが、五名は非常によく類似し、七名はほぼ類似し、六名はかなり異なる。
 - 3、二回目における誤りも、やはりピアノ科のものであつたが、前と同一人ではない。
- 三、第二テスト(被験者は二と同じ二七名)

- 1、全体としては、よく出来ていて、彼らには、やさしすぎるテストのようである。
- 2、三番目のものが、与えられたリズムより異なるもの五名、他は正しいリズムによつていた。
- 3、第一のメロディーに引きずられる傾向はなく、むしろ四つ共異なる調子の旋律を作つたものが大部分で、五名はハ調で作曲した。

学 習

第二日 第一室

(58) 連想検査の基礎的研究―
知能の優劣と反応語類型との関係

群馬大学 倉 石 精 一
群馬大学 潮 田 武 彦

1、研究目的 連想検査標準化のための基礎的研究を行つて来たが、今回は知能の優劣と反応語類型との間にごとの様な関係がみられるかを解明するために一連の実験

を行つてみた。

問題点として次の二つの点を考えてみた。

(1) 従来の研究結果のように反応語類型が変化移行して行くものか、及び類型基準自体に対する再吟味。

(2) 同一年齢段階において知能の優劣という要素がどのように反応語類型の上に現われて来るか、又これが年齢の変化と共に従来の発達段階的变化と平行に移行して行くか。

2、実験条件 従来使用して来た刺激語を更に整理し小学校低学年生徒にも充分理解の行くようなものとし、県下の若干の小中学校の児童生徒中知能程度の明瞭に優劣のつくもの約二六〇名に対し二〇分の時間制限の下に個別検査方式により実験を行つた。

3、結果

(1) 従来我々のとつて来た整理方法は反応語平均値を求め、それにより比較する段階に止つていたが、t検定を行うことによりかなり明瞭な傾向を把握することができた。

(2) 従来の反応語類型基準は大體肯定されたが、中間連合中若干の連合型—反対、類似、例示、印象及び模写—につき若干の疑点が見出され、類型の位置の変更、改廃も考慮されるべきものがあるように思う。

(3) 知能の優劣による差が反応語類型の上によつてにみられるかについて、かなり明瞭な有意の差がみられ、これらの類型を見出すことによつて知能程度の差を知る指標とすることが出来る。

(4) 分散分析による検討を行う必要を認められた。

☆ ☆ ☆ ☆

(59) 児童期における記憶の発達

東京学芸大学 小島 潔

目的 記憶研究を学習現象と関係づけ、児童期の記憶

発達を捉える事に重点をおき、記憶発達に影響を与える条件を分析する。特に今回は視覚記憶に関する検査の一部を報告する。(検査)は昭和二七年一〇月一七日—二月五日。(被験者)は西多摩郡、杉並区および新宿区の小学校一—六年の児童約一、八〇〇名。(方法)(1)材料—絵

(花、鶏、靴、猫、柿)。図形(△□○◇)、数字(7、1、9、2、5)。仮名(い、や、う、に、ほ)を画用紙に描いたものの四種。(2)検査方法—学級を単位とした集団検査。その順序は絵→図形→数字→仮名で一種毎に五枚を一枚ずつ提示し、その順序に記憶し、結果を用紙に記入させる。一種類(五枚一組)の提示時間は一〇秒

記憶結果は四〇秒以内に記録させる。

結果 ①各種の成績を総合した結果、一般に大差ない

が各学年を通じ、女子が男子よりも良い成績を示す。②男女共に低学年の発達量が年で学年の進むにつれて発達量が減少する。③各学年におけるS・Dは学年の進むにつれ減少。個人差も少なくなる。④低学年における地域差が顕著である。⑤記憶材料の順位を保持することはテストIでは一年から高まり三年で最大の制約をうけ、その後制約が少なくなつてゆく。テストII—IVでは各学年共に制約のうけ方は一年が最大で、爾後減少している。

⑥記憶材料の種別成績をみると、総合成績に対する各種類の比重は低学年においてテストIが最小、テストII・III・IVの順に重くなつていく。そして六年になると全体に対する各種の成績比重は大差なくなる。

一番困難とみられるテストIと一番容易とみられるテストIVとでは低学年では約一年の差がみられることは注

目に値する。

今後、反面において分析的な検査、研究を進めたいと思つてゐる。

(60) 幾何学的思考過程の研究 (2)

東京教育大学 小保内 虎夫
東京教育大学 荻野 勝之助
東京教育大学 三浦 泰二

幾何学的思考における中心転換が如何にしておこなわれるかを「直線gの同側にある二点A・Bから一旦gに触れて両者を結び、最短距離になるように直線g上に点Pを求めよ」という問題について分析することを試みた。

今回の実験では、この問題解決に必要な公理、定理を総ての被験者六七名に指導し、その上で被験者を三つの群に分け、一群には「最短距離」の定理を、二群には、「対称」の定理をとくに強調し、三群には何も与えない。その各群の解決への相違を比較検討し、いかにして中心転換がおこなわれるかを明らかにしようとした。

一般指導では「二点間の最短距離」「点と直線間の最短距離」「三角形における角」「三角形の合同、二等辺三角形、線分の二等分、等によつて対称の諸相」「三角形における辺と角の大小」を指導し、また一群には「三つの点の移動」「三つの点の間の点の移動」「多数点における点の移動」の各場合における最短距離について強調しさらに折線の長さを直線に表わす指導をした。二群には「点、直線、三角形夫々の対称」について強調する。三群には何も与えない。以上三つの各群について、被験者が解決可能な方向へ指向していると見られるものを、その過程に従つて分類する。解決への道は、定理に導かれて、ある一般的試行の方向が定まり、そのうちに与えら

れた図形を見て図形のもつている幾何学的性質が浮び、課題解決に必要なものがはつきりしてきて解決に至る。解決に至らなかつたのはでき上つた直線が最短距離であることをはつきり意識するのになしに、対称であることのみを見、最短距離は最短距離として見、三角形の辺は辺として見、具体的な図形から自由になることができなものである。すなわち、定理、公理が個々に存在して、そのつながりがつかないために解決できない。そのつながりが如何にしておこなわれるかが明らかにされることによつて中心転換の本質が明らかにされる。本実験によりそのおおよその性質が明らかにされた。

(61) 効果の法則についての一研究

山口大学 久芳 忠俊

学習における効果の法則については、Thorndike 以来言われていることである。所謂、満足を感じて学習が行われる場合には学習は強められ、その反対の場合は学習が弱められると言う原理である。しかしその後彼は刺激に対する反応には苦痛であり不愉快な感情を伴う場合でも、その不満足な感情は必ずしも、刺激と反応との間の結び付きの関係を弱めるものでなく、却つて刺激に対する快の反応と同程度に苦痛の反応をも選択し、多少の苦痛は忍んで、目標達成に努力するものであると報告している。この事実については、既に Peterson の大人についての実験が行われているが、本調査においては児童生徒が、愉快なものをよりよく学習し得ると同時に不愉快なものでも同程度に学習し得るものであるか否かを調査せんとするのが本研究の目的である。手続は小学校一、二、三、四、五各学年を用い、使用の国語教科書中から新しい言葉を選択して(ゆかい)(ふゆかい)(どちらでもない)の三項目についていずれかを選択させ、更にこ

の新しい言葉の書取りをやつた。この結果(ゆかい)と感じたものには及ばないが、相当(ふゆかい)と感じたものについても学習されるものであることがわかる。むしろ(どちらでもない)と感じたものが却つて学習されていない事がわかる。尚、男女の差異を調べると女子の方がやや優れている事がわかる。

以上から学習指導に当つて教材自体が生々と興味深く愉快に活用されることが大切であると同時に、教師が教材に対して面白くもなく、またその何れでもないような取扱いをすれば、その学習の効果は全然上らないということになる。そこで学習指導に際して感情、情緒を学習過程の中に取り入れねばならない。ここに教師の性格や人格性の重要性が指摘されるのである。

(62) 英語学習の心理学的研究(7)

——日英語動詞範疇上の比較——

東京教育大学 小俣内 虎夫
東京教育大学 永沢 幸七
東京教育大学 村石 昭三

日英語動詞を表現上に見られる意味の分化に範疇基準をおいて、それぞれの動詞の範疇を作成したところ、英語七種類、日本語八種類の範疇を定めることが出来た。すなわち、①基礎的、②準基礎的、③社会的、④抽象的、⑤擬人的、⑥心理的、⑦助動詞的、⑧助詞的(日本語のみ)な意味を表わす動詞である。今回は日英語動詞範疇上における量的並びに質的な比較考察である。量的な比較考察として、とりあげた動詞は say (云う) see (見る) be (ある) do (する) go (行く) have (持つ) の六語である。各動詞のそれぞれの範疇に含まれる動詞の種類をあげた。

この量的な比較考察として、一般に、①英語において

比喩的表現、または類人的表現がどの動詞においても日本語に比較して圧倒的に多い。これは英語の擬人的表現が小説等に見られる一種の技巧修辭として使われるだけでなく、広く会話、評論、新聞等にもふだんに滲透し使われている結果と思われる。②日本語においても英語に比較し、また同じ範疇内でも多い。それは日本語では動詞が文の中枢を占めるものであり、故に動詞的文体であるために、基本語としての動詞はよく助動詞的にテンスを表現する役目なり、あるいは意味の弱まったものは他動詞の補語として複合詞的な役目なりを持つ結果と思われる。

次に質的な比較考察としては、日英動詞の特殊用法のみをとりあげ、これが相手国語においてはどのような表現されるものか、どんな表現法と一致するものか、それを中心にして比較対照しつつ日英語の持長を見ようとするものである。(例) go (する) の場合、日本語では、 Δ 音がする ∇ Δ I hear a sound ∇ Δ I smell something ∇ 対して英語は Δ I hear a sound ∇ Δ I smell something ∇ となる。日本語の表現では、主語に知覚あるいは、体感される対象物がくるのに対し、英語は、主語に人称がきて、感覚動詞で対象を表わす。 Δ する ∇ が自動詞に対し Δ hear ∇ が他動詞であるのも一つの相違である。その他われわれはかかる日英語の特質を比較検討することにより英語学習を効果的ならしめることを意図することができる。

(63) 桃太郎童話を通してみた

児童の精神生活—第二報

広島女子短期大学 山内 美子

対象 五—七歳の男女(五—七歳は面接法、その他は質問紙法) 方法・成績—(昔々或る所にとり昔々

とは何年前か)という時間観念は一、〇〇〇年が三〇・二%、一〇〇年が二三・〇%、三〇〇、五〇〇、七〇〇、五〇、一〇、というような順で男女差は別に認められぬ。 (日本一の黍団子とはどんな団子か) に対し「力持になる」が二九・一%、「めつたにない珍しい団子」が一九・二%、「勇気が出る」「体が丈夫になる」などで男女差は認められない。(猿、犬、雉の三匹をつれて鬼退治に行つたがどうしてもつと沢山つれて行かなかつたか) に対し「団子が少いから」が三一・二%「舟が小さいから」が三〇・五%「三匹より他に来なかつたから」「喧嘩をするから」などで大差は認められない。(猿、犬、雉の他に従者をつれてゆくなら何をつれてゆくか) という質問に対し、例えば、鼠はベストにかからせるから、猪、狼、ごりらは引かくからなど、その他いろいろ解答している。(桃太郎のお話はどんな所が好きか) では「宝物を持つて帰る所」が三四・五%、「鬼退治」が二六・三%、「桃から生れる所」、「彼の少年時代」などである。百分率検査の結果「宝物を持つて帰る所」は $\frac{10}{10}$ 、「鬼退治する所」は $\frac{10}{10}$ 、「桃から生れる所」が $\frac{10}{10}$ となつた。年令別にみると「誕生」は幼年期 $\frac{10}{10}$ 、学童期 $\frac{10}{10}$ 、「鬼退治」は学童期 $\frac{10}{10}$ 、幼年期 $\frac{10}{10}$ となつた。

結論 ①時間観念は一、〇〇〇とか一〇〇〇で多数を表現するようである。②団子とは桃太郎の人格を表現しているようである。③小児は話、挿絵をそのまま受入れることを物語つてゐる。この点から考慮すると絵本の影響力が甚大と思われる。④動物の特徴を生かして物語る点が面白い。⑤桃太郎の話を書くことにより、所有欲・攻撃欲・支配欲を満足させると同時に Komplex を解消させるものと思われる。(結論の①⑤は質問順序に従つて説明した)

人格・異常

第二日 第二室

(64) 価値とパーソナリティー

日本大学 木村 禎 司

オールポートの価値の型から特に高い価値(四〇以上)を示すものを抽出し、そのパーソナリティーをK・ヤングの事例史研究の「内的生活」の項目について被験者(大学一年生)各自が記入した資料により研究した。被験者の大部分は男子、理論、宗教および審美型に少数の女子が含まれている。情緒の安定は、政治、理論、経済、社会、宗教、審美の順になる。ここに感情生活と価値の型との関係がある程度見られるように思う。

つぎにパーソナリティーの細部にわたつて比較して見る。諸衝動の統合はどうかの問に対し、分散的と答えたものは政治型、審美型一三、集中的が政治型一六、審美型一三であつた。かように以下顕著なものは、外的関係よりも内的生活に沈潜する傾向が強と答えたもの政治型四、審美型一六である。不安、恐怖または失敗感は政治型はなしと答えたもの一四、審美型はありと答えたもの一九である。攻撃的態度、怒の反応は両型極端なものはいく、普通と答えたものが多い。(理論型ではそれが「まれにしかない」と答えたものが多い。)優越感についても両型共通と答えているものが多く、審美型では「なし」と答え、政治型では「あり」と答えたものがややある。自信に関して緊急事態に対処する能力は、政治型が高く、審美型が低い。困難な場面で耐える力でも同様に政治型が強い。自信を試められる場面は避けるというのが審美型に多い。他人を支配しようとする場合では他の注意をひく、親切に訴えるが両型共多いが、審美型にはつ

むじをまげると答えたものがあり、政治型にはそれが少ない。自分を可哀そうに思うかの問では審美型ではしばしばが多く、政治型ではまれといふのが多い。劣等感については政治型ではつくろふといふのが多く、審美型ではかくさぬといふのが多い。自己省察に関しては両者共通なものが多いが、審美型では投射(他を非難する)傾向が見られ、政治型では他の批評には寛大に聴従しないといふのが多い。葛藤場面では政治型は行動に訴えるといふのが多く、審美型には空想に訴えるが多い。審美型は満足感に動揺があり、政治型はなしが多い。要するに価値の型においても硬心、軟心の別があるように思われる。

(65) 收容生活不適者のパーソ

ナリティーについて

犯罪生物学研究所 遠藤 辰雄

一、收容生活には、種々の種類・段階が考えられるが心理学的に最も興味のあるのは強制的拘禁によるものである。すなわちこれは自由社会における既成の自我活動が一応拘禁によつて阻止された後、再び施設生活に適應して行く過程をとらざるを得ないからである。

二、拘禁の原因となつた犯罪・非行が自由社会の生活に対する不適応であつた如く、收容生活においても別の形で不適応現象を生じている。

三、施設收容初期の不適応現象は、拘禁による異常ショックが起す特異行動(拘禁精神異常・自殺・意気消沈・悲歎・自己不確定・犯罪原因関係者に対する攻撃的発作)に表われる。これらの異常行動は数日ないし一、二カ月のうちに次のような適応型に変わる。

四、これらの適応型が不適応現象として観察されるの

は、施設管理上または收容者集団において問題となる場合である。具体的には処遇困難者または規律違反者としてあげられる、主な適応類型と受刑者および保護少年の百分比を示すと次のようになる。(自我の優越感保持に目標をおくもの 31(3*), 39(22*), 攻撃的態度に終始するもの 23(12), 17(15), 消極的順応型 40(1), 28(5), 孤立化を目標とするもの 4(1), 11(6), 仲間はずれにされるもの 2(2), 5(5), 計100(24), 100(53)

* () 内は不適応現象の発生率。
五、不適応現象は、受刑者と保護少年との比較によつても分るよう適応類型に含まれるケースの量に比例している。優越感を満足させたいもの、積極的な攻撃性を示すもの、等の保護少年は、ポスの Personality を中心とする集団行動、向う見ずな喧嘩、暴行、逃走、争論等の不適応行動が顕著に見られる。

六、更にこれらの不適応現象が過去の Case history の分析によりある程度予測され得る反面、今後復帰する自由社会に対する適応の予測に收容の効果としてどのように現われるかについて、文部省科学試験研究費により検討をすすめている。

(66) しつけの文化型に関する研究

(第一報告)

調査問題の統計的検討

名古屋大学教育学部 石 黒 大 義
野間教育研究所 藤 原 喜 悦

一、研究の目的 本研究はしつけの文化型が子どもの行動及び性格形成にどんな影響を及ぼすかを明らかにするために行ったものである。今回は本研究に使用した調査問題を次の四点から統計的に検討した結果を報告する。

(1) 調査問題の全般的傾向、(2) 調査問題の信頼度、(3) 調査問題の項目分析、(4) 調査問題の因子分析法による検討
二、調査方法 (1) 調査の対象は群馬県下、三つの村の小学校(二校)、中学校(一校)の児童の親四五名である。
(2) 調査期間、一九五三年二月～四月、(3) 調査方法は教師が児童の指導上の必要から本調査を行うこととして実施した。

三、調査結果とその考察 (1) 調査問題の全般的傾向、平均得点は、放任型二・一七、溺愛型一・八二、専制型一・八一、民主型三・〇八、となつている。得点分布はいずれのしつけ型も正常とはいえない。八領域の過半数を一定のしつけ型で占めているもの一或一つのしつけ型で五点以上の得点をもつものは五九名(四〇・七)もいるから、それぞれの家庭のしつけの変化型を、この四種のしつけ型をもつとして考察することが可能となる。
(2) 調査問題の信頼度、一カ年の期間において、再調査を行い、前回の場合との間の相互相関を求めたところ、放任型・七四、溺愛型・四六、専制型・四八、民主型・六九の相関値を示し、いずれもあまり高くない。特に溺愛型と専制型の信頼度は低いから今後この点に関して検討して見たい。
(3) 調査問題の項目分析、点二系列相関法により項目分析を行ったところ、すべて有意な相関値を得た。
(4) 調査問題の因子分析法による検討、調査問題にもとづいて四つのしつけの型の相互相関を求めそれに因子分析を行ったところ、放任型は負の第一因子負荷量を、溺愛型・専制・民主型は正の第一因子負荷量を持つていた。なお放任型・民主型は負の第二因子負荷量を、溺愛型は正の第二因子負荷量を持つていた。第一因子は愛情、第二因子は強制にそれぞれ関連するものと解釈される。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

(67) 盲児の研究 (五)

盲児の語彙と経験的背景

東京教育大学 尾 島 碩 心
東京教育大学 ○佐藤 泰 正

本研究は(1)盲児の経験的背景の解明、(2)盲児の語彙の研究を目的とする。

方法 小学校三年の正常児男女別各一〇名、盲児一〇名(男六女四)計三〇名を用い、五〇音の一定文字で始まる言葉を一分間にできるだけ多く書かせ、次の一四字で始まる言葉(か、は、き、せ、た、と、ち、ほ、い、け、て、そ、ま、へ)について分析を行った。

結果 ①語彙の数及び種類は盲児の方が正常児より多い(一・五倍)、②語の頻度別比較では頻度一の語が盲児に多い。これは盲児の言葉の個性の強いこと、言語面で盲児が分化発達していることを示すが、反面、盲児の言葉に普通性が少ないこと、またそれは盲児の言葉の不安定性に連ると思われる。③語彙を品詞別に見ると、名詞は正児、盲児変りないが形容詞、動詞、いわば用語は正児の方が僅かに多く、副詞、即ち修飾的なものに於て盲児が優る。前者は real なものが多く、後者は unreal なものが多いと思われる。さらに、同じ形容詞でも状態を表わすものは盲児に少ないが、抽象的なもの、感情的なものは盲児に多い。動詞についても抽象的なものは盲児に多い。盲児は視覚以外の感覚動詞が多いが、正児は視覚動詞が多い。副詞については状態を表わすものが盲人に多い。④名詞を分析すると、盲児に多いものとして、抽象、観念、身体生理、固有名詞等が、正常児に多いものとして、動物、植物、遊び、スポーツ、身廻品家具等があげられる。これから盲児は抽象的観念的な世界に住むこと、盲児の自我のせまいこと、生活体験の

限られていることが知られる。なお、動物反応を細かくわけると、獸類、虫類は正常児に多いが、鳥類、魚類は盲人に多い。これから盲人の経験が視覚以外の聴、触、味、嗅覚に依存していることが知られる。植物では木を主体とする語が盲人に少ない。⑤盲人と正常児の差が著しい語をあげることによつて語が視覚に訴えるか、その他の感覚に訴えるかを知ることができる。⑥以上の他にA盲人は聴き誤りから誤語が多い(タヌキ、タノキ、キモノ、キモチ)。B盲人に特有な語として点字関係の語が見られる。C盲人は語の連想反応類型が次の三つに分れる。辭書型、固執型(鉄、鉄びん、鉄管、の如し)アットラソングム型(頭に思いつくままに連想する。正常児は大半がこの型である)D盲人はラジオや童謡、又学校で習ったこと等の影響が強く働く。

(68) 盲人の夢の研究

東京教育大学 榊原清

(1) 夢をみるのは毎日か、一日おきか、三、四日目か一週間おき位か、たまにみるか殆ど見ないか。夢は眼でみるものであるから盲人には夢はないとも考えられるが調査の結果正常人と余り変わりなく多く夢をみる事が分つた。毎日、隔日、三、四日目と報告した者は四八・四%、夢が単なる眼の機能でなく身体機能全体の作用であると見るべきである。「たまにみる」「殆ど見ない」というのは四三・四%であるから正常人より少ないことが想像される。

(2) 夢に最も多く現れるのは、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚のいずれであろうか。先天盲は、聴七一・四%、視一九・三%、触七・六%、味嗅各々〇・九%となり聴覚の夢が最も多い。問題となるのは視覚的経験がないのに視覚の夢をみることであるが、いわゆる補助作用で視

覚の夢と感ただけで、實際聴覚、触覚などと混然一体のものを認めているに過ぎない。後天盲は視七・六八%、聴一〇・七%、触七・二%、嗅三・六%、味一・九%、で視覚が第一位である。先天盲の場合は視八〇・〇%、聴一・四四%、触四・四%となり、正眼者と余り変らないが、触覚の夢がかなり多いのが特徴である。

(3) 夢でみる色はどんな色か、夢では色が殆ど全部にあらわれている。特に赤、青、黄、緑の出現数が多い。興味あることは先天盲にも多くの色が現れていることである。これも視覚の夢のように補償的に感じているに過ぎないだろう。ただ色として白、黒が現れることが多い。

(4) 夢にあらわれる内容、夢の内容の種類はどんなものがあるかについて、主な夢二三項について調査した。これによると友達、家族、学校の順となり、学校や家庭生活の夢が多い。ついで楽しい、恐ろしい、悲しい、火事、人に追われる、願ごと、苦しい等の夢の順になる。これを分類すると、恐怖の夢が最も多く(二九%)、次に学校生活(二二・四%)、家庭生活(二二・六%)となる。これを一〇年前(昭和一八年)の研究に比較すると、家庭生活(一九%)、学校生活(一七・五%)、恐怖(一六・八%)、時局(一四・五%)であり、今回時局の夢が三・三%しかないのは時代の反映であろう。

(69) ろう児の知能および学力について

東京教育大学 平沼良
東京教育大学 八野正男
東京教育大学 松村正枝

一、目的 ろう児およびろう生徒の知能並に学力を測定し、彼等と普通児との差を調査し、ろう教育のカリキュ

ラム作製上の参考資料にするのが目的である。

二、被験者および方法 都立某ろう学校小学部、中部児童生徒計一四五名に対し、それぞれの学年に相当した知能検査ならびに算数と国語の学力検査を実施した。

三、結果および考察 学力検査は算・国それぞれ二学年にわたつて実施し、それら四テストによるEQを平均し、平均学力とした。各学年ともIQおよびEQはすべて平均以下である。大部分は中の下、劣の段階に属し、残りは最劣の段階に分布している。算数と国語の学力の間には差異が認められない。

次に知能検査の各下位検査別にその得点を正常児と比較すると、B式知能検査では比較的高い値を示し、A式ではその逆となる。このことから「ろう児」の言語障害が彼等の知能に少なからざる影響を与えていると考えられる。

次に算・国両学力検査正答を算数は計算問題と応用問題、国語では比較的簡単な語い問題とその他の問題に区分して考察すると、簡単な計算問題および語い検査では言語障害の影響はあまり考えられないが、問題文の比較的長いその他の問題では影響が認められる。

四、結論 以上のことから、ろう児の知能や学力は正常児に比較して劣るものであり、また「ろう児」の知能や学力にはそれぞれ言語障害が少なからざる影響を与えていることがわかる。また「ろう児」の知能を測定する場合には、B式A式の両者を用いなければならず、B式のみでは非常によい値を示し、正しい知能の測定にはならないのではないかと考えられる。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

(70) 聾啞児の概念的思考の発達

東京学芸大学 鈴木 治

一、問題 聾啞児と正常児との概念的思考を比較し、聾啞児が正常児の如何なる発達段階にあるかを問題とした。

二、方法 Oleron なるカード、問題の説明にはブック、実験には Weigle 型のカードを使用し、これを多様分類させた。

三、被験者 小学校児童二年から六年まで各学年二名(男女)、聾児一二名(四、五、六年にわたる)。但し聾児の生活年齢は一三歳で中学一年に当る。知能指数はほぼ等しいものを選択した。

四、結果 (a)作業の成功率、一三歳児(聾)は二、三学年若しくは四年(九、一〇歳)に当る。(b)概念使用の順序、正常児は Normal な順序、形、色、数の傾向を大体示す。聾児は順序が一定しない。

五、作業時間 聾児は正常児と比較して一般に長時間を要す。

六、行動特質 Oleron の指摘したような特質が見られた。(1)原理複合、(2)選択、(3)質問、(4)空間性、(5)交替など。(2)、(3)は Oleron による。

七、結論 Oleron は Niveau Perceptuelle と Niveau Conceptuelle との二層を区別し、概念的分類は Niveau Conceptuelle が dominant でなければならぬと指摘した。(1)聾児は一三歳であるが、Niveau Perceptuelle が dominant である。本実験に於ては小学校二、三年若しくは四年に相応し、年齢的には三年乃至四年の差が見られる。この概念的思考の低いことは、形、色概念の混乱と見られる。と同時に原理概念、空間性、交替などの特質が著しく現れている。これは同時に Niveau perceptuelle

の dominant を実証するものである。

(71) ろう生徒の助動詞使用能力

東京教育大学 荒川 勇

ろう生徒の助動詞に対する能力を検索し、彼等の言語思考発達の様相を解明し、指導計画に示唆を得んとするのが本研究の目的で、助動詞補充文章完成テストを手掛りとし、作文分析を参考とした。

テスト結果は、各助動詞及び活用別に正解度を出し、前者はこれを五段階表に整理し考察を進めた。

これによつて各助動詞別に見ると、ろう生徒で中等部高等部とも、六〇・一―一〇〇の正解度を得たものは極めて少なく、〇―四〇・〇の段階に多い。普通中学校、高等学校生徒の正解度配分と逆の配分で、ろう生徒中等部全体として、普通中学校一年生に及ばぬ結果となっている。

活用別に見ると、何れの活用も、ろう生徒は普通生徒より正解度は劣っているが、中等部通覧して、連体形仮定形が他の活用よりおとる。

テスト結果についてみると、比較的多く認められた誤りはろう生徒の時相判断の薄弱、簡単安易なる断定、自己主体等の心理傾向の現われとして注目される。その他テスト文を読んだ時の主観が支配して種々詞を挿入させ結果として誤りとなつた傾向が顕著に伺われる。

以上によつて、助動詞の如く動詞、形容詞、其の他の詞を助けて、完全な意味をもつ詞に対する能力の不十分が、ろう生徒の思考思想発達の上に大きな不利を与えている様相を伺い得る。而して又かかる思考の未熟が逆にかかる助動詞に対する能力を未熟ならしめている面も考えられる。然し一般には助動詞に対するろう生徒の未熟は、それが一乃至二、三音韻で形成され、而も付加語に

して独立した意味を持たず、ために幼少の時から談話の際見落されたり、理解が困難であり、指導の際にも余り重点をおかれず、安易な形式に文表現を統一してしまつたりしたこと由来するものと思われる。従つて今後ばかりか助動詞の用法、又助詞の用法にも、比較的早いうちから指導の際注意を払われる必要があらうと思われる。

人格

第二日 第三室

(72) 大学生に対するアジャスト

メント・インベントリーの試み

——インベントリーの

構成と適用結果の概観——

茨城大学 磯貝信太郎
茨城大学 林 正 邦

一、目的

学生補導のため、われわれは大学生の個人的、社会的適応がどのようなものであるかを明らかにする必要がある。そこで本学の新入学生に対しベル氏(H. M. Bell)の適応性診断目録を試みた。その結果を考察してこの目録の構成および性格を検討し、どの程度の改訂によつて実用化しうるかを見定めようとする。

二、適応性診断目録の構成

a 家庭的適応、b 健康的適応、c 社会的適応、d 情緒的適応の四つの分類項目毎に、それぞれ三五問の具体的問題があり、合計一四〇問が無秩序に排列されている。被験者はそれぞれの問題に対して、ハイ、イイエ、?、の何れかに応答する。得点の高いものは分類項目毎に、

望ましくない適応を示すものとされる。

三、被験者および実施方法

被験者は、茨城大学教育学部、農学部の新入学生男女三七五名である。

実施期日は第一回昭和二八年六月二七日、第二回同年九月一四日である。

四、結果

(1)各分類項目別にみると、家庭および健康に対しては適応している。(2)男女別にみると、家庭的適応では男女の得点の間には有意の差が認められないが、女子学生の方が他の面において望ましくない適応を示していると断定することが出来る。(3)ベル氏の段階基準に含まれる比率をみると男女とも各分類項目について望ましくない段階に含まれる比率が三〇〜五〇%である。(4)各分類項目の得点について内部相関をみると、相関係数は〇・〇二〜〇・五六で低い相関を示している。(5)再検査による相関係数は、各分類項目毎にみると、〇・六九〜〇・八一で比較的高い相関を示しており、平均値においても、有意の差が認められなかつたので、適応性について或程度の恒常性が認められると思う。

(73) 大学生に対するアジャスト

メント・インヴェントリーの試み

——インヴェントリーに現れる

学生の適応問題——

茨城大学 岡山 超
茨城大学 村山 順子

適応性診断目録によつて、適確に不当適応の学生を発見するためには、目録を構成している各問の内容と発問の様式が適切であることが必要であり、又学生の問題の所在を発見するためには、各問の標準的な応答分布が明

瞭になつていることが必要である。

この点から(1)で発表された様な構成をもつ H. M. Bell 適応性診断目録により一大学の二学部の学生男二三九、女一三六、計三七五に実施して得られた結果について問から得た応答を吟味した。

先ず全一四〇項目の応答は適応上望ましくない応答、望ましい応答、疑問の応答の三つにわけ、それぞれの応答出現率を計算した。そして一四〇項目は、a 家庭的適応、b 健康的適応、c 社会的適応、d 情緒的適応の四つの分類項目にわけられ、各分類項目に平均応答出現率を計算して、標準応答出現率とした。各分類項目の標準応答出現率の分布は、 χ^2 値 31.72, $P < 0.01$ で有意な差を示した。

次に各分類項目に含まれる三五問の一つ一つを標準応答出現率と比較して、その差をも値で検定し $P < 0.05$ 以下の項目のみを応答出現率が多いと断定しうるものとしてとりあげた。

各 Section について各問を検討すると各個人の適応問題を検討する場合には、得点と共に各項目の標準応答出現率との連関において検討することが重要であると思われる。

尚、以上の様な結論は一大学の二学部のみから得られたものであるため、更に、被験者の範囲を拡大し、当診断目録の信頼性、妥当性を検討しなければならないことを附加しておく。

(74) 文章完成法による性格の診断

お茶の水女子大学 松村 康平
お茶の水女子大学 藤保 子

目的 Sacks の Sentence Completion Test を基にしてこれを実際の教育の場に生かす時、どの程度生徒の理解

に、又性格の診断に役立ち得るかを検討した。

方法 Sacks の S.C.T. を用い、質問紙にて集団テストを試みた。

対象 東京都 S 区 B 中学校、三年男子二八名、女子一九名 計四七名

研究課程 ① S.C.T. の結果より、各個人の問題点を診断。診断の尺度は Sacks の紹介による。

次にテストより擲えたものが正しいか否かを以下の方法で確かめた。②受持教師の臨床的観察を聞く、③「児童生活調査表」により家庭の状態および親の生徒への態度をしらべる。④生徒の「つづり方」および「手紙」を参照する。

結果 その一 S.C.T. により診断し得る一五の categories に対する四七名の問題点存在の状況をしる。

その二 個人別考察に研究の重点をおく。すなわちその生徒の行動を要求と目標との関係より擲えんとした。

結論 S.C.T. の一試みに過ぎず、その理解の限界も又明らかではあるが、個人理解に役立ち得る事は疑いない。残された多くの問題を更に検討し Projective Method の各方法において、どの目的のためにはどの方法を用いるべきかの研究こそ、今後の課題であると思う。

(75) C.S.T. による性格診断の

一 研究

群馬大学 中島 義行

研究目的 本検査の吟味的調査を行う。

研究課題

一、中学生が四一種類の刺激語の意味を理解して検査に依っているか。

二、検査成績の頻数分配が正常分配曲線をなすか。

三、本検査成績は信頼度が大きいか。

四、本検査成績は妥当性が大きいであるか。

研究方法と研究経過

一、課題一については無選択にえらんだ多人数グループとして中学校各学年二組ずつ計三〇〇名に検査終了後四一種類の刺激語の意味を書かせて国語の上から正答数誤答数、無答数を調べた。これらの刺激語については、検査時適切な説明が必要である。

二、課題二については無選択にえらんだ中学生四四二名について本検査を行い、向性、性度、異常反応の三項目に互り成績の頻数分配表をつくつた。本検査の採点基準は概ね良好であることと認めた。

三、課題三に対し本検査二年生一〇〇名の同じグループに同じ検査者が同じ文法で二回行い、前回の成績と後回の成績との相関関係を相関係数を算出して調べた。

四、課題四に対し、向性についても性質についても異常性についても、行動観察の上から明瞭に認められる甚少く異つた二グループを被験者として本検査を行い、両グループ間における検査結果の差異を明かにする。特に異常点については乖離病氣質、躁鬱病氣質の二つのグループ間の検査成績の差異を調べる。目下調査中にて、次の大会で第二報として発表の予定である。

(76) ゾンデイ・テストと性格学

(第二報)

- 三河病院 山田悠紀男
- 三河病院 海野信義
- 三河病院 高倉兼義

ゾンデイ・テストによる診断の実際(この場合は性格診断)は大体以下のような方式に従つて系統的に行われる。

一、衝動ファクター

二、衝動ベクター

三、症候群(性格症候像、生理的および病理症候群)

四、諸行動指数: 症状反応百分率

傾向緊張商

傾向緊張量

五、衝動構造式

などの分析である。

第一報では、われわれは主題に関し方法論上の一般論を素描し、附加的に上記の第四項目(諸行動指数)の価値の検討を僅かに試みた。

第二報では、われわれは、やはり極めて非野心的ではあるが、ゾンデイが作成した性格症候表(上記の第三項に含まれる)の含味を問題とした。

原版五回法を正常成人五〇例に、原版および日本版(われわれの作成した)一〇回法を正常成人二五例に個人テストによつて施行した結果は(1)一三〇の性格症候像出現率は日本版に僅かに少ないが大略平行する。(2)症候像結合の頻度の最大公約数は次の如くである。結括弧のなかの数値は原版の頻度の最大公約数を示す。

$$\begin{aligned} & \text{すなわち } h \text{ 回 } \text{FF} + (+), S \text{ 回 } \text{F} - (-), e \text{ 回 } \text{F} + (+) \\ & \text{(O), } h \text{ 回 } \text{FF} - (-), k \text{ 回 } \text{F} - (-), p + (-), \\ & d \text{ 回 } \text{F} + (+), \text{O}(-), \text{O}(-), m \text{ 回 } \text{F} + (+) \end{aligned}$$

(77) 文章完成法テストの

Validity のこと

——ソシオメトリック・ステイタスを規準として——

- 精神医学研究所 佐野勝男
- 東京少年鑑別所 横田仁

問題 sociometric status を一つの規準として、文章

完成法テスト(SCT)より status がどの程度予測出来るかを問題とした。

手続き 高校生一〇〇名に二年間に互り sociometry を三度行い(一年三学期末、二年一学期末、二年三学期末)それによる status を高いグループ(二三名)、低いグループ(一九名)にわけた。

以上四二名の SCT を三人の判断者に与え、各々独立に次の点より評価することを求めた。

(1) SCT からうける全体的印象を Kretschmer の類型にならつて記述し、その他気づいた点、例えば攻撃的行動がみられ内動的緊張がある等自由にパースナリティのスケッチを書くこと。

(2) status 予測をすること。

Kretschmer の類型を用いたのは臨床をする時よく人格が把握されることと、判断者はこれに慣れており、概念定義よりくる判断の誤差は殆んど考えなくてよかつたためである。

結果 (1) Kretschmer の類型によるパースナリティ判断の結果は一致度高く約九〇%を示したが、分裂性氣質において最もよく一致し、循環性氣質がこれについている。inner state のについては、攻撃的行動の有無、自己確信の度合、人格構造の分化度、楽観—悲観、については比較的よく把握され、一致度も高い。以上より一般的にいつて、パースナリティの内容的構造はよく診断把握されているといつても差支えないと思われる。

(2) status の予測は stable star, middle star は約七五%の予測を示すが unstable star は約五〇%を示す。以上よりみると、status は一義的に SCT より予測することは難しく、殊に unstable star では出来ないといふことがわかる。SCT と status において多少その現われる層に違いがあるのではないかということが考えられる。

(78) 生活史問診時のPGR

横浜少年鑑別所 水島恵一

被験者は審判前の収容非行少年一五例、PGR測定操作を開始後、計算、単純な質問を三〇秒間隔で行い、その後次の七問を三〇秒間隔で問う、簡単に答えさせる。(一)父はいるか、二、母はいるか、三、父はきびしいか、四、母はきびしいか、五、学校は楽しかったか、六、いじめられたか、七、特に悲しい思いをした事があるか)この際反射量、三〇秒間の自発性反射量、三〇秒間の伝導度変化値を測定する。

結論 一、答え方に問題点があるか否かによりPGRに差があるかどうかは、この実験の例数からは何ともいえない。差がない傾向を示している。その他も推計的検定を経られるものは少い。二、具体的に詳しく答える事は反射を高め又基礎伝導度を高めるが、自発性反射には殆んど影響はない。三、事実上に問題がある場合には反射量、自発性反射、基礎伝導度が共に高くなり易いが自発性反射が最もよくこれを表現する。

解釈 生育負因のような問題点に触れた時に起る情緒は、うそ発見などの場合と違い、悲しみと呼ばれるようなものに近い。従つて刺激時の反射量に関係はしても、自発性反射には関係しないのであろう。

吟味 最も問題点を表現する自発性反射ですら、完全相関には非常に遠く、コンプレックスの発見法として今の所実用にはならないが表情観察とも合せて、問診の補助としては用いられる。今後質問の形式を改良し、例数を加えて吟味を続けたい。

☆ ☆ ☆ ☆

(79) 作業曲線と性格との関係

宇都宮少年鑑別所 横田象一郎

クレペリン内田精神作業検査が終戦後性格検査として各方面で用いられているが、作業曲線と性格との関係については未だ充分な研究が発表されていない。

第一に正常者の性格類型をどうしてきめるかが問題であること。第二に作業曲線の分類が従来の定型を基準にした段階的な判定では不都合であること。

筆者は臨床診断の経験から正常者の性格を分裂性性格と循環性性格との二大特徴群にわけ、更にヒステリー性と癲癇性の二つの精神特徴が各々の性格群と混合した場合を考え、次の六つの類型に大別した。すなわち、①分裂性性格(SS)、②分裂性とヒステリー性との混合(SH)、③同じく癲癇性との混合(SE)、循環性性格群もこれと同じく、④(XX)、⑤(XH)、⑥(XE)の三種に分類した。

一方作業曲線も従来の定型を基準とした分類から離れて作業経過の特徴(すなわち曲線型)から、従来の定型経過(u)のほか上昇型(e)、中高度(m)、下降型(e)、平坦型(h)、波状型(w)の六種に大別した。

上記の分類方法に従つて筆者は刑務所並に少年院の収容者(一八歳以上二三歳未満)一、六七二名の臨床的に充分診断された資料を整理したところ曲線型と性格との間に予想以上に緊密な関連のあることを発見した。この結果は戸川教授の記載とも略一致し又筆者らの予想を充分実証したものであるが、性格の診断が筆者の先入観念によつて影響されているという非難も予想されるので、被験者の自己診断による別個の資料を作成してみた。

筆者の性格分類基準に応じた質問表を作成して五〇〇

名の保護少年について実施した結果と曲線型との関係を調べたところ、数字的にも前の結果と殆んど一致した結果が得られた。詳細な研究はまだ継続中であるが以上の結果だけからみても作業曲線が性格診断にかなり大きな手掛りになることは結論できると思う。

(80) 教師の性格

埼玉大学 山根 薫

学童の成長と発達におよぼす教師の性格的影響の大きいことが推測される。それ故、現在の教師の姿を明らかにすることが大切であろう。その目的を果たすために第一に向性検査を行い、第二に教師の自己観察および他人観察によつて教師の性格像を描き出してもらい、第三に、教員養成学部(学生)たちに教師の姿を学窓からどうみるかを述べてもらった。

向性検査の結果をみよう。小学校教師としてそれぞれの教科を専門に行っている男子六二人の結果において、工科二〇人、一〇五・七、SD二九・七、体育科一九人、一八・二、SD二六・六、音楽科一〇人、一〇〇・一、SD二〇・三、理科一三人、一〇八・八、SD一九・五、平均向性指数一一〇・七を示した。日本人の成年男子の指数としては、そこに特異の事実を見出すことは出来ない。しかし各教科別に比較したときに体育科教師の向性指数は他教科のそれと有意の差をもつて異なることをみる。この検査を大学在学中の学生について行い、体育科専攻のもの(一般教科のもの)とを比較すると体育科専攻学生一九人、一一一・〇、SD二二・二、一般学生三二人、一〇八・六、SD二五・五であつて、この二組の間にも明らかに有意の差を認めることが出来る。これらの事実を体育科に關係する教師および学生が性格に外向性を強く示すことを明らかにする。かくて、淡路式向性検査

査の結果は、教師の性格が一般人よりも異なることを示さない。

次に作文法による教師の性格像についてみたい。年齢四三歳から五五歳、教師経験年数二八年から三四年、その間校長としての経験年数、数カ月から一七年の教師熟練工四五人に書いてもらった。それらの表現は多種多様であるが、類語を整理して六八種を区別した。それらうち積極的によい面として示されたもの二四個、「ない」という接尾語をつけ消極的表現をしたもの、およびわるい面を示すもの四四個であった。

検査Ⅱ

第二日 第四室

(81) 智能検査における幼児の

十・一の得点散布に関する

二・三の問題 (中間報告)

愛育研究所 桜井芳郎

一般に智能検査を行うと多くの場合その得点散布は始めに十、終りに一の密集地帯がありその中間に十の混合地帯がある。この混合地帯は児童によりその幅が異なるがそれを一定の年齢段階で考察するために本研究で鈴木ビネーを施したCA五歳、MA六歳の幼児一八六名およびCA六、MA六の幼児一三九名を、①混合地帯皆無、②短い混合地帯、③やや長い、④長い四型に分けた。その結果CA五歳群では①二四名、②五九、③五二、④五一で、CA六歳群は①二〇、②四六、③三七、④三六で各類型相互間の比率は両群共ほぼ等しい。また各類型の得点率グラフでも両群はほぼ同型。従つてCAの差による混合地帯の変化はないといえよう。

更に各類型のIQ分布はCA五歳群では①類型で二二〇が二〇%、一一〇が八〇%、②で一三〇が七%、一二〇が二二%、一一〇が六六%、一〇〇が五%、③で一三〇が三%、一一〇が二三%、一一〇が六七%、一〇〇が七%、④で一二〇が二七%、一一〇が六〇%、一〇〇が一三%であり、CA六歳群では①類型で一〇〇が三〇%、一〇〇が七〇%、②で一〇〇が一五%、一〇〇が八〇%、九〇が五%、③で一〇〇が一五%、一〇〇が七五%、九〇が一〇%、④で一〇〇が一〇%、一〇〇が八五%、九〇が五%で両群とも各類型相互間にIQの著しい差はない。正常児相互間では混合地帯の長短と智能とは関係がないといえよう。

そこで混合地帯と性格との関係をみた。これは検査の際幼児の性格がその要求水準に影響し、それが混合地帯の幅に作用するかと考えたからである。CA五才群一八六名の母親に根気のない型(M型)と負けず嫌いで根気のある型(A型)との質問調査をし、その回答一一二をみると、①②類型(失敗下降型といえよう)ではM型四〇名、A型一二で、③④(成功断続型といえよう)ではM型一六、A型四四であり、混合地帯の短い型では根気の無い者多く、混合地帯の長い型には負けず嫌いで根気のある者多くみられ、混合地帯の幅を規定する要因の一つとして性格の影響が伺われる。

(82) 改訂簡易個人知能検査と

国民知能検査尺度形式と

の内部相関は

日本大学 渡辺 徹

昭和二八年六月一同一〇月都総務局や教育庁の協力、都内各地区小学一〇校見本三、〇〇〇名に改簡個知(初

試大正一五)を実施、この個知の性質信頼度検討のため某小六年七七名に国知(昭二四訂)を実施、両検査の相関内部相関係数($r \cdot P \cdot E$)を計算。両検査の代表値個知の平均と国知の合計との r は $+ .33 \pm .0699$ で十ではあるが低い。内部相関は概して予想通、前者の低相関は個知問題が一三、四歳どまりのためか、見本三、四、五年にとれば r はどうか、個知と年長群(11:12)三四名と年少群(11:6)三七名とに別ち、六名を除外、それぞれのMA得点を国知合計との r は二下検平均と年長群は $+ .20 \pm .1094$ 、年少群は $+ .77 \pm .0549$ で二下検 r も年少群が大。国知合計と個知平均との分配曲線は両者正常に近い。前者知能の例外。

年少群個知平均のIQ分配、正常平均知(106.5-91)二〇名、劣等(89-80.5)一三名、境界線低能(74-72)三名、決定的精薄魯鈍(67.5)一名。これは国知のIQと不一致もある。最後に個知見本平均はビネエよりもポータィアスの支配、このビネエは国知合計に r が比較的高、算推、文完、同反の順で近く、類推、記数の順で遠い。ポータィアスは文完と比較的高、その文完は r が類推で同反とすこし高い。それで簡個知の改訂標準化のために国知を前者既済小三、四五、年に試み、前叙の検討を反復と同時に、各年相当の問題の置換も必要になつて来ると考へる。(昭二八・一一・二三・水戸)

(83) クレペリン内田作業検査と

情意徴標について

東京少年鑑別所 佐伯 克
教育衛生研究所

クレペリン内田氏法連続加算検査が近来盛に一種の性格検査として用いられるが私はこれに全面的には賛成し難い。それは私が今迄日本心理学及び例年の本学会で各

種の角度から、クレペリン内田法による曲線の経過、つまり型を決める各種因子の存在につき述べてきたが曲線型決定因子は多く、しかも判定により正常異常類別に当りその内の何れの因子が決定的に働いているかを見出すことが難しい上に、例えば異常とした曲線の所有者が如何なる性格特性をもつかを俄に断定するのは難しいと感ずる。他方、或個人の情意的特徴を診断し、処遇の具体的な方法を把握するのが我々臨床家の仕事であるなら、所謂性格検査の如きもので或個人の正常異常を鑑別するという程度で当然満足すべきでない。従つて現在私共が或個人がいかなる情意的状態にあるかを検診する最も基本的方法である問診法で先ず個人の情意的状態を診、これに性格検査を参照すべきである。しかもこの際良い検査とは具体的情意的特性の所在を明示するものであるべきである。この立場からクレペリン内田法をみると、私共はこの検査がいかなる情意的特性の所在を明示するか未だ十分な資料があるとはいえない。

私が昭二七年五—十一月に検診した東京少年鑑別所収容非行少年男子二六九名と練馬区内新制中学生男女計一八七名につきその検診結果をのべると、情意的変調状態軽度の者は内向的というか外界の刺激が個体内に蓄積する如き傾性を示す者は曲線型良く、刺激に対しに對し発散的傾性を有するものは曲線型良くない。

なお個々の情意徴標の組合せと曲線型の問題は複雑で俄には断定し難いが、曲線型を左右する如き情意徴標の存在が明確にされるならば、かかるアルバイトライステングによる診断法は一段と有益なものにならうと考えるので、今後更にこの問題に對して追求したいと思うものである。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

(84) クレペリン作業曲線の可逆

的記号表現と分析的研究

——あべ・クレペリン法解説——

奈良学芸大学 阿部 孫四郎

内田氏はクレペリン法を各行作業一分一回休憩型に改めたが判定上の束の仮定と分析不十分が禍し処理の煩雜と記号表現困難を齎した。先に発表したあべ・クレペリン法では曲線の変化が各行作業時間の他、行の交替にも依存することに着眼し三〇秒交替で行数を増し、休憩効果の変化を見るため三〇秒宛二四行作業三分休憩六行作業三分休憩六行作業の所謂二休憩三〇秒型とした。作業量は休憩前で大学生総合曲線以上をA、高校生以上B、中学生以上C、小学生五・六年以上D、同四・五年以上E以下Fとし、総合曲線と重ね合せて直観的に判定する。また作業量は総合曲線の特質をO、これと対蹠的に異なるのをPとし主に知的因子による第一項、主に意志因子の第二・三・五項、主に情感因子第四項を立てる。すなわち第一項：休憩前後の三段階の各初末の一行につき総誤が知られ六行総和の1/10を超せばP₁、無誤はO₁とす。第二項：第一段階第一行a、第二段階第一行d₁、第三段階第一行d₂の間で、aが最高はP₂、最低はO₂とす。第三項：a、d₁、d₂でd₂最低はP₃、最高はO₃とす。第四項：a、d₁、d₂がどれも各段階最高突起でなければP₄、共に最高ならO₄とす。第五項：契型陥没がありその行の作業がこれを挟む各一行の1/2平均以下ならP₅、それ以外はO₅とす。但し初末の行はその隣の一行の1/2を標準とす。尚作業量零の行があれば再検査。以上各項共等価なら被験者に有利な方に判定。

かく量質両面を記号化しA₀₁、P₀₁、B₀₁、D₀₁等と表現するが臨床的には正常項目Oと異常Pとの差が二以上なら正

常、1以下は異常、その間なら要注意。この記号表現は曲線復元が可逆的に可能。

クレペリン法は本来予診的役割に留るべきで、これに直ちに疾患を決めようとするのは体温計で肺病と診断するに等しい。わたくし等は補填緊張法とあべ・ロールシヤツハ法を是と合せ用いている。詳しくは奈大教育研究所刊「性格の科学」参照。

(85) 作業性格検査 (第五報告)

——作業内容と作業曲線型との関係——

東京都職業適性相談所 板倉 善高

作業能率に影響を与える素質、性格、態度等を紙筆のみで捉えようとして次の四種の作業

- 一、相隣る二数の和の一位の数をその中間に書く作業を上から下へ連続する。
- 二、片カナを平カナに直してその右下に書く作業を上から下へ連続する。
- 三、片カナを平カナに直しその右下に書き次に片カナの下の数と右隣の数の和の一位の数をその中間に書く交替作業を上から下へ連続する。
- 四、桜の花べんと雄雉の欠けた所を足す作業を上から下へ連続する。

を一分毎に作業量を記録しつづ一五分間連続し、五分間休憩の後再び一五分間継続する。——この四種の検査を東京都内中学十数校の三年生各約一、〇〇〇名に実施し各種曲線型(半月型又は正常型(N)、上昇型(U)、下降型(D)、平坦型(S)、突出型(O)、陥没型(I))の出現率を見た。

この結果から観察される主な傾向は、作業が末梢的で簡単なときは曲線の動揺少く一般に滑かな弓形を辿るが

思考的になり複雑になるに従つて動揺を増し、曲線の型は加算は尻下りの弓形、書換は休前は置換作業に似た上昇曲線で休後はほぼ水平に進行する。

複合では加算と書換の中間、休前やや上り気味、休後と初頭突出後は幾分下り気味でほぼ平坦に進行している。完成作業では休前は尻上りの弓型、休後は尻下りの弓形である。

休憩効果は加算が最も少く一二%前後、書換が複合では一七—二〇%、完成は最も多く二〇%以上となつてゐる。

なお特に注目すべき点は、加算と複合の両作業では、四、五分目項にコブ状突起が現れるが、これは思考又は複雑作業に因る精神的疲労のため中枢機能と末梢機能の分裂化現象が現れ易くなつたことによるものと推察される。

(86) 適応の問題について

東京大学 白 居 利 明
東京大学 尾 形 健
東京大学 西 条 共 安

パースナリティの研究で問題となつてゐる適応ということ「硬さ」の概念の方面から取扱わんとするものである。「硬さ」の概念は把握の仕方よりして現象的には異つた様相をとるものであり、又最近の研究では一個の精神特性とみるより、学習の場合の一つの機制と考える様な風にもなつてゐる。併し、ある特定の現象に条件づけられた状態を、それを混乱し易い条件に再構成させる過程をもつて、類型化を行うことは可能であると思われ

る。この実験は以上の様な所論から、四個の図形（抹消検査図形）をある特定の数字、例えば3165（この数系

列は奇数の場合は奇数のみ、偶数なら偶数のみ）におきかえ一行を三〇秒で二五行だけ作業させ、三、五分の休憩の後に6666（以前に用いた数字の前半と後半を組かえる）等の系列にして、一行二〇秒で二五行の作業を行わせ、その間に生ずる作業量の曲線の推移、及び誤謬数を作業量比、前後作業量比誤謬比、及びその位置などを、今迄の実験結果から得た分布によつて格付分類するものである。この場合の分布は、いわゆる正常な集団より得られたものであるが、対象群の特定の精神特性を示す患者群は正常集団の分布の辺縁部に位置することが判明してゐる。

この様な結果から、曲線形と分布の格付けからパースナリティの側面をとらえんとするのであり、実際上の問題としてはクレペリン検査との相関はある程度認められたいプライングの実習の場合の予診には関係のあることが認められた。併し、実務成績との関係については積極的な結果は認められていない。臨床面に対しては実験例が少数に失する為、積極的な結論は出し得ないので今後の実験に俟たねばならない。

(87) 向性検査による自己評定と

他人評定

立教大学 山 本 至 朗

自己評価と他人評価の差に及ぼす要因を分析し両評価の差の傾向を検討するため、心理専攻の男女学生各四名を自己評価者とし、その各々の家族五人、同性友人一〇異性友人五を他人評価者として、淡路式改訂向性検査の自己・他人評定用で研究した。自己評価者は①自己評価②想像的自己評価（各々の他人評価を想像し他人評定用紙で評価）、他人評価者は①他人評価、②想像的他人評価（自己評定用紙で他人評価）する。そこで自己評価と他

人評価の差に及ぼす要因をA自己評価者に、B他人評価者に原因する場合と、C自己評価者を含む特定群のもつ特性、即人間関係にある場合の三つに分けた。これらを説明するため想像的評価（一種の Cross Questionnaire Technique）を用いたのである。

その結果、①男子では自己評価よりも他人評価が内向に傾く。女子では逆に他人評価が内向に傾く、家族、友人、異性の各群のうち、家族による他人評価が内向に傾く。②他人評価者自身の向性は大きく影響しないが、ただ異性間における自己評価では他人評価者が外向性の方がよく一致し、同性間では内向性の方がよく一致する傾向あり。③一般に自己評価者が男の時は想像的評価と他人評価との一致度低いが、女では逆に高い傾向あり。また家族集団では想像的評価の方がよい。想像的評価よりも男は内向に女は外向に評価する。④他人評価と想像的他人評価との関係は③と同じく男子の場合想像的評価は良くなく、女子の場合は良くなつてゐる。また男女共に自己評価以上に想像的的自己評価の傾向はあるが、その度合は女子の場合に強い。

以上のことから考えられることは自己評価の差が、評価者の向性によるよりも、評価者を含む集団、特に性別による傾向の差が強いことからして、現行の方法に多分に反省の余地があるのではなからうか。今後の研究もこの点について進める予定である。

(88) 健康度測定法の一試案

田中教育研究所 田 中 寛 一

私は大正一五年に $w^{1/3}/\lambda$ 、 $w^{1/3}/ch$ など五つの公式で健康度を測定する案を述べた。しかし $w^{1/3}$ の如き数値は計算が面倒であり、また早見表を作るには肺活量や体重の単位が異なるので、それらの間の比率を求めるのは正

しいやり方か否かにつき疑をもつようになり早見表作成は断念して、次の五公式による新案をたてることにした。すなわち①SSW—SSL, ②SSW—SSCH, ③SSVC—SSA, ④SSVC—SSCH, ⑤SSVC—SSWである。ただしSS: 偏差値 (sigma score), W: 体重 (単位kg), L: 身長 (cm), CH: 胸囲 (cm), A: 坐高 (cm), VC: 肺活量 (cm³)。従つてSSWは体重偏差値, SSLは身長偏差値, SSW—SSLは体重偏差値から身長偏差値を引く意味、で他はこれに準ずる。

これらの公式を適用するため昭和一五年に都の児童生徒につき測定した結果における各年齢級の平均と標準偏差を求め、それらを基準として昭和二七・八年に新たに二小学校の六年生(一一・二歳計男一五二名女九三名)の身体測定値を $SS = (m - M) + \frac{1}{10}SD + 50$ の公式を適用して偏差値として上記五公式に当はめた。他方各校の校医受持教師、体育教師に別個に各児童の健康度を一〜五点の五段階で報告してもらい、三人の与えた評点を平均して各児童の評定健康度とした。次にこれにより各項目ごとに M, Mi, S.D. を算出して各公式の効果を調べた。

ゆへに SSW—SSL が+ならその個人は身長から期待しうる以上の体重を持つているのである。上記公式の値が健康を示すのならば平均は評定健康度一点から二〜五点と順に-の値は順次小さくなり、更に+の値は大きくなる筈である。その他の公式でも同様である。各項目ごとに点検してみると多少不十分な所もあるが大体この要求に適している。また測定数が少いから、決定的な断定は下せないが、この方法で全体の健康度と不健康の場合に、その所在が明らかになつて、健康指導法を考える上に参考になると思う。

人名索引

(数字は抄録番号を示す。細字は一
五回、太字は一六回を示す。)

遠藤辰雄	江川允通	坂東義教	相川高雄	畔上久雄	浅見千鶴子	浅井浅一	荒川富之	荒井富之	青木義治	青木孝頼	安藤公平	安藤寛	安東功	天野章	阿部満洲	阿部孫四郎	安部淳吉									
65	122	83	109	107	41	128	71	134	23 38	82	50 65 114	74	39	1	40	137 84	30									
樋口幸吉	蛭川栄	平沼良	平井信義	林正邦	早川元二	橋本洋一	橋本重治	長谷川貢	原俊夫	羽場究	後藤保子	古籾安好	藤原喜悦	藤野藤俊	福島吉郎	遠藤勉										
27	86	56 69	108	43	15 41	72	7	37	115	112 40	68 18	29	74 77	74	10	6 66	21	134	36							
亀井定雄	岩崎一郎	伊藤安二	板倉善高	磯貝信太郎	石若嘉甫	石川英夫	石川英夫	石井哲夫	石黒大義	乾孝	井坂行男	井上国秋	今井欣悦	今橋みや子	池上喜八郎	市川典義	細野尙志	星野命	堀内幸雄	堀淑昭	堀辰己	本多允				
135 8	105	14	73 85	72	102	49 6	14	15	6 66	13	2	27	85	27	57	88	112 40	81	33	60	56	11				
児玉省	久芳忠俊	葛谷隆正	黒田正大	倉石精一	蔵原惟光	熊倉弘	九鬼範子	工藤正悟	清原健司	北脇雅男	岸本末彦	木村俊夫	木村禎司	菊地哲彦	川村章	桂島真禧雄	勝井晃	加藤正明	鹿股寿美江	狩野広之	金子秀彬	金原勇	金井達藏			
54	52 53	50 51	110 61	17	39	64 58	29	23	59	89	53	78	85	27 28	93 26	99 64	26	13	32	7 8	9	53	75	45 92 106	96	115
三浦泰二	三木清子	松本洋	松浦健児	松村正枝	松村康平	松井賚夫	松井三雄	松田岩男	増田幸一	増田昭子	間宮武	榎田仁	牧野勝	近喰秀大	駒田惠津子	小山泰江	小谷和子	小佐治朝生	小室庄八	小松澄子	小島潔	小林さえ子	小林えつ子			
60	46	103 48	76	69	74	74 77	44	74	95	54	55 67 113	77	40	29	52	121	138 12	74	16	92 45	59	138 12	36			
成瀬悟策	中山四方吉	中山茂	中村則子	中村弘道	中西重美	中島義行	中川大倫	永沢幸七	村山順子	村山秀雄	村中兼松	村上英治	村石昭三	森田良久	森内秀子	森永和彦	森田清	茂木茂八	宮部勇	水島惠一	三苦正雄	南博				
124	19	22	51	3	120	85	75	90	58 62	73	5	47	81	62 133 16	42	94	119 10	5 20	67	17	78	67	119 10			

大西誠一郎 128
 大村政男 29 65
 大石昭司 7 8
 大平勝馬 11
 大橋正夫 136
 奥沢貞貞 34
 岡山超 73
 岡本昌秀 131
 岡本栄一 33 34
 岡田寅治 9
 荻野勝之助 60
 尾島碩心 67 116 117
 尾河直太郎 94
 尾形健雄 86
 小倉胤雄 31
 小熊虎之助 60
 小口忠彦 55
 小川再治 1
 小保内虎夫 60 41 123 62 42 125
 O
 西本美枝子 43
 西島義雄 126
 根本茂 37

佐藤泰正 117 67
 佐藤棟男 66
 佐藤初重 2 3
 佐竹隆三 25
 佐野勝男 131 77
 佐伯克 34 28 83 33
 桜井芳郎 71 81
 桜井一男 37
 阪本一郎 3 110 54 2
 坂田一 46
 榑原清 68 67 118
 齊藤義夫 110 54
 齊藤良子 119 11
 齊藤美智子 138 12
 齊藤幸一郎 127
 西条共安 86
 S
 小沢祐保 51
 大脇義一 30
 大脇園子 72
 大内茂男 24 25
 大須賀哲夫 80

鈴木初美 120
 鈴木一司 31
 薄田司 84
 砂山延雄 61
 杉田尙道 27 26
 菅野重博 97
 末利博 44
 須見芳紀 18
 須藤泰男 125
 須田陽 22
 副島羊吉郎 20
 塩川武雄 7 8 67
 塩入円裕 29
 篠塚睿 44
 潮田武彦 64 58
 品川不二郎 55 67 113
 清水利信 69
 島田茂男 30 44
 四方実一 67 87
 関秀光 112
 清安津子 50
 沢田繁 53
 佐柳武 104
 佐藤亘宏 28
 佐藤正 21

田中熊次郎 42 4
 田中君枝 51
 田中敬二 91
 田中英彦 49 67 67 88
 田中寛一 67
 玉岡忍 48 57
 竹内緋佐子 12
 竹田俊雄 45
 高島正士 101 15
 高野悦子 121
 高桑益行 37 76
 高倉兼藏 62 63
 高橋和年 35
 高橋春江 36
 田口孝之 139
 田上京子 54
 橋上觉勝 102
 太城藤吉 102
 T
 鈴木祐子 54
 鈴木幹人 52
 鈴木治 24 25 70
 鈴木清 55 67 113

山田久喜 70
 山田宏造 98
 Y
 渡辺徹 49 24 26 82 65
 渡辺健夫 38
 W
 台井利夫 56
 臼井利明 86
 宇留野藤雄 25 35 98 24
 宇野善康 79 76
 海野信義 62 63
 梅津寛海 26
 U
 内山喜久雄 4
 鹤田正一 100
 妻倉昌太郎 19 52
 辻正三 46
 友田不二男 12
 遠山正雄 67
 辰見敏夫 132 55 67 113
 田崎仁 67 67

湯本信夫 47
 吉田正吉 7
 吉田専吉 118
 横山雅臣 43 129 130
 横山映子 43 129 130
 横田象一郎 79
 八野正男 56 69
 山岡淳 33 34
 山本敏雄 9
 山本至朗 87
 山本晴雄 32
 山内美子 63
 山根薰 80
 山川博臣 33 34
 山田悠紀男 76 62 63

応用心理学論文集

—第一五・一六回大会発表研究抄録—

昭和三十一年九月二五日印刷
昭和三十一年九月三〇日発行

編者兼
発行所

日本応用心理学会

事務局長 長谷川 貢

東京都港区芝南佐久間町一ノ七

印刷所

株式会社 研

文

社

代表者 岩本 光博

東京都千代田区神田神保町二ノ二四

発売元

株式会社

中

山

書

店

代表者 中山 三郎 平

